

(翻刻) 松井羅洲 『真実玉英』  
まことのほえ

木越俊介

要旨

本稿は、近世後期の京坂において活動した易学者・松井羅洲(一七五二—一八二二)が著した小説作品『真実玉英』を翻刻するものである。



## はじめに

松井羅洲まついらしゅうは、宝暦元年(一七五二)生、文政五年(一八二二)没の京坂で活動した易学者である。羅洲には数多くの著作があり大半が易学に属するが、そのうち二作の小説作品(『真実玉英』まことのはえ、『墨画雪』すみえのゆき、ジャンルとしては読本とみなせる)がともに写本(後述の通り稿本と見られる)として残されている。本稿は、これまで紹介される機会がほとんどなかったこれら二作のうち、『真実玉英』を翻刻するものである。この『真実玉英』は十五世紀半ば、応仁の乱を前にした時代を背景に、前半では真鶴真介、後半では玉繩小太郎という二人の主人公を軸にその活躍を描く作品である。

なお、松井羅洲その人、ならびに『真実玉英』の概要については、「易占家と読本―松井羅洲『真実玉英』の世界像―」と題した拙稿(『近世文学史研究』第三卷、ぺりかん社、二〇一八年発行予定)において触れているので、ここでは翻刻を専らとし、それ以外については必要最小限の事項に絞って記述することとする。ただし、書誌についての記述は右拙稿と重なる部分があることを断っておく。

### 〈書誌〉

- 底本 東京大学附属総合図書館蔵(請求記号A00:4142、貴重書)。写本一冊。
- 装訂 袋綴じ(四ツ目綴じ)。
- 表紙 二十二・八×十六・一糎。白茶色。卍繋ぎ地に波雲に竜の丸文様。
- 編成 現在の状態は一冊だが、全六「冊」ま(※「巻」という表記は用いられていない)から成り、それぞれ「冊」まの二

十五丁、「冊の二」二十二丁、「冊の三」二十二丁、「冊の四」十一丁、「冊の五」二十二丁、「冊の六」十三丁、以上全七十五丁。当初から全一冊だったのか、後に合綴されたものかは未詳だが、形態、厚さなどから見て、前者の可能性が高いと推測される。

○外題 左肩に子持ち杵を摺った題簽を貼付し、「まことのはえ 完」と墨書。

○序 なし。

○目録 「冊の一」冒頭に「まことのはえぞうもくろく 眞実玉英総目録」として二丁半付す。

○内題 「まことのはえ 眞実玉英」。

○署名 「羅州逸渙（撰述）」（内題下）。

○行数 十行。

○柱 表丁に見える位置に「冊の一（〜六） ○（丁付）」（一冊目の本文一丁目のみ、「眞実玉英 冊の一 ○（丁付）」と墨書（図2参照）。なお、一冊目冒頭の「総目録」部のみ「冊の一 総目 ○一（〜三）」とされ、次丁からの本文部には改めて丁付が「一」から付される。

○挿絵 なし。

○跋、奥書、識語 いずれもなし。

○蔵書印 現所蔵印以外なし。



以下に補足事項を記す。東京大学附属総合図書館には本書と『墨画雪』が同じ帙に納められ、帙の左肩には「墨画雪 真実玉英 松井羅洲稿本」と墨書される。これを受けてか、『国書総目録』にも本書を「稿本」と記し、他の伝本は現時点で確認されていない。本書には貼紙による訂正や見せ消ちなどによる修正箇所が多数あり、この点や字体に鑑みて、羅洲による稿本の可能性が高いと思われる。なお、成立年を直接うかがう手がかりはないが、一方の『墨画雪』には文化十一年夏の年誌を有する序が付され、右とそう隔たらない時期かと推測される。出版を企図して執筆されたのかは不明である。

#### 〈凡例〉

- 一、漢字は原則として現在通行の字体を用いた。
- 一、誤字・衍字などは原則として底本通りとし、適宜傍らに（ママ）と注記した。なお単純な誤りについては、断らずに改めた箇所がある。ただし、振り仮名と送り仮名に同じ平仮名が重なり衍字と判断される場合（例・「尋ね」たづね）は、送り仮名の方を残し、振り仮名は断らずに削除した（例・「尋ね」たづ）。
- 一、宛字は原則として底本通りとした。
- 一、仮名の濁点は新たに施した。ただし、筆写者の清濁表記は必ずしも統一されていないため、両用の可能性がある表記に関しては底本通りとした。なお、「専はら」などについては半濁点を施し、「専ばら」などとした。
- 一、筆写者の仮名表記にはやや独自性が認められ、また必ずしも一貫してはいないが、強いて修正や統一はせず、原則底本通りとした。この点を踏まえた上で、なお底本には、特に小字となる振り仮名において判別しがたい文字（例・「あ」「お」、「ゑ」「え」、など）があったことを断っておく。

一、振り仮名は原則として底本通りとした。

一、底本には貼紙や見せ消ちによる訂正があるが、原則、修正後の表現・表記のみを翻刻し、修正箇所については特に明示しなかった。

一、句点は原則、底本通りとした。ただし、原本になくとも、句点がある方が読みやすいと判断された場合は、翻刻にあたり新たに施した。なお、底本に読点は使用されていない。

一、翻刻にあたり各冊ごとに通しの丁付を(一才)のごとく示した。

一、会話、心内語に相当する部分を「」で括った。手紙の文面などには必要に応じて◇で括った。

一、漢字一字の反復符として「〈」が用いられている場合は「々」に置き換えた(例・「段〈」↓「段々」)。

〔翻刻〕

真実玉英総目録  
まじつのはま えそうちゆうく

冊の  
まじつ

第一回

遇レ水而漂

○真鶴真介洪水に遇ふて。文武修行の為に諸国遍歴するの話

○真鶴真介玉川のほとりにて金子を恵み予へて少女の一命を救ふの話

○真鶴真介武蔵野にて盗賊数許討とめるの話

○真鶴真介盗賊の家に舎りて危難に遭ふの話

第二回 逢金而止

○真鶴真介常陸花園山の麓にて磊落翁に逢て道芸を学ぶの話

冊の二 (一才)

第三回 望山而去

○真鶴真介木曾の山中にて怪物を射取るの話

○真鶴真介山名宗全が邪害を避て京都を去るの話

○星野漣女恩のために機密を泄漏の話

○真鶴真介山陽山陰の両道を遊歴するの話

第四回 抛石而困

○真鶴真介石見国にて士官成て寵臣の忌にふるゝの話

冊の三

○黒崎弾正奔獲を設けて真鶴真介を陥るゝの話

第五回 見星而走 (二ウ)

○星野勢平真鶴真介を牢獄より救ひ出し俱に佗国に走るの話

第六回 縁木而立

○真鶴真介作州津山にて仕官とゝのふの話



冊の四

○真鶴が勇略星野が粉骨終に新庄の城を抜き取るの話

○津山の諸士各恩賞を被ぶるの話

第七回

從道而学

○玉繩小太郎幼稚より母のいさめに従ふて如道人の許に侍りて道をまなぶの話

○玉繩小太郎如々道人の許に有る事十年にして文武の道三二才の妙義ことごとく皆通達するの話

冊の五

第八回

乗馬而進

○玉繩小太郎西国に往く途中奔馬に遭ふて立身するの話

○玉繩小太郎津山にて文武の試を経るの話

第九回

得日而昇

○玉繩小太郎赤松家の勇士日根野中務を討とりて西播の諸士を帰服せしむるの話

冊の六

第十回

著土而榮

(二ウ)

○玉繩小太郎土居の英姫を娶りて蕃昌するの話

第十一回

値玉而聚

○真鶴真介玉繩小太郎と父子の名のりを為し。且つ夫婦再会するの話

第十二回

由劍而親

○真鶴真介狩り場に於て手練をあらはすの話

○木工頭殿真鶴真介が佩刀御覽じてより兄弟たるのよしを証し話説給ふていよ／＼君臣相親しみ給ふの話(三才)

(白紙) (三才)

真実玉英冊の一

羅州逸換 撰述

## 第一回

遇水而漂

○真鶴真介洪水に遇ふて。文武修行のために諸国遍歴するの話

ひちうすればかたぶききみつればかく 天地盈虚 与レ時消息すと。こゝに人皇第一百三代後花園天皇の御宇に。相摸国石橋山の麓。真鶴の里に。真鶴真介義則と云郷士有り。其先祖は三浦介義澄が末葉にして。三浦の前司義村が滅亡の頃より此所に住居しける。父は三浦真左衛門尉義包と云て。永享の結城合戦の時にも大ひに武功をあらはせるが。鎌倉管領家に憚かる事有て。真鶴と称せり。此真介は幼少して父母に後れ。外に兄弟もなく。妻をいまだ迎ず。ひとり身にてぞ有ける。其家の子に。五十嵐(四才)文蔵と云。忠直律義の者有りて。それにかしづかれてぞ成長しける。家内には男女のめし使ひ数十人有て。いとゆたかなりける。其生質 沈勇 温順。喜怒妄りに面にはさず。毀誉にも拘はらず。失得にも管はず。惟義の当る所のみ。専と勉ぬる。君子の風有る人物たり。折には足柄山の奥に在す。如知道人のもとに参りかよひたりしが。或時道人に其終身の進退取舍の主要を願ひ尋ねれば。道人宣ふには。「今より中年の半ばまでは。苦勞多かるべし。これ男子の徳を磨くの定りの功業なり。中年の半より老年に至りては。万事心のまゝなるべし」とて。四言十二句の偈の如きものを記してたうべぬ。其文に云。

遇<sup>みづ</sup>水而漂<sup>にあふてたよひ</sup>  
逢<sup>かね</sup>金而止<sup>にあふてとまり</sup>  
望<sup>やま</sup>山而去<sup>をのぞんでさり</sup>

抛<sup>ほし</sup>石而困<sup>をみよてくるしみ</sup>  
見<sup>き</sup>星而走<sup>をみよてたち</sup>  
縁<sup>き</sup>木而立<sup>よつてたち</sup>  
得<sup>ひ</sup>日而昇<sup>をえてのぼり</sup>  
緣<sup>ゆま</sup>木而立<sup>よつてたち</sup>  
得<sup>ひ</sup>日而昇<sup>をえてのぼり</sup>

從<sup>みち</sup>道而学<sup>にしたがふてまなび</sup>  
乘<sup>うま</sup>馬而進<sup>まにのりてすすみ</sup>  
得<sup>ひ</sup>日而昇<sup>をえてのぼり</sup>

著<sup>つち</sup>土而榮<sup>につきてさかえ</sup>  
植<sup>たま</sup>玉而聚<sup>たまにあふてあつ</sup>  
由<sup>けむ</sup>劍而親<sup>むによりてしたむ</sup>

かくの如く記して与へ給ひぬれば。真介はつゝしみてこれをいたゞきてしぞきぬ。二十一歳の春。供人二人ばかりつれて。京都に登りし事の有りしが。其留守の中に。石橋山よりすさまじき山づなみ涌出で。此真鶴より土肥のあたりは。一面の湖となりて。家も林も悉く皆底のもくづとなり果ける。此事京都に聞へしかば。真鶴真介いそぎ故郷に帰りてみれば。水はよほど干たりけれども。そこらは皆沼野とぞ荒たりける。三浦の菩提所は。三四町も山よせの高みなりければ。この処には氣遣ひも有まじとて。墳墓まゐりせんとて。此寺院に至りければ。五十嵐文蔵夫婦の者は。此寺に水をよけて居たりしに遇ふて。互ひに其善なきをぞ悦びける。(五才)文蔵云には。「さても去ぬる八日ひるより風雨強かりしが。夜に至りてはいよゝ烈しくて。夜半過の頃。いとすさまじき音のしたりけるが。忽ち洪水出来たりて。はや床の上に登りぬ。あれよ。それよといふうちに。すでに鴨居にも及ばんとす。おのれ夫婦はまづ屏に梯子して家内の男女を高みの方へ逃出さしめ。御神主を守り奉り。土蔵を開きて。用意の金子六百両を肌につけて。夫婦はからふじて。此寺へ遁れ来りぬ。故に此方の男女のめし使ひには。一人もあやまちはなく候へども。数十个村の中にては。男女幾千万人の死没にて候ひし。殊に真鶴の郷は第一番の水の突き当りにてや。家宅も土蔵もすべて皆流れ行て一面の平地となり申候」。やがてかの金子を出して。これを真介にさゞぐ。真介はこれを二つわけにして。三百金を文蔵に与へて云。「前つかた如知道人の偈の文に。水に遇ふて漂ふと有つるが今日事なり。これ前つかたより天數(五ウ)の定まれる所にして逃るゝ所なし。故におのれはこれより四方に遍歴して。文武の道の修行せんと思ひ定め

たり。汝は我にかはりて此金子を以て。かりに邸宅を造り。田畠は流れたりとも。山林はのこりつれば。それらを以て。先祖の祭りをつぎくれべし。其うちには又もや帰り来る事もあらん」とて。先祖の墳墓にねんごろにいとまごひして。東国さしてぞ出行たり。

○真鶴真介玉川のほとりにて金子を恵みて少女の一命を救ふの語

真鶴真介は六郷のわたしよりまへにて日はくれたれども。宿り求めそなひて夜路を歩行。六郷のわたしをこえて。川に沿ふて半道ばかり行ける所に。一人の少女逸散にかけ来りて。やにはにあたりの石を拾ひて。両方の袂へ納れて。已に川水へ飛込んとす。真介走りよりてこれを抱きとめ。「少き女の如何なる故によりて。身を投んと(六才)するや」と。「其いさみを聞ん」と云へば。女は涙にむせながら。「私義は此かたはら小畑と申里の農人。太左衛門と申ものゝ女子にて御座候。母は先達而相果申候間。只今は父太左衛門と弟太吉と私と三人住居いたし申候。父は前かたは庄屋もつとめ居申候得ども。打つゞく不幸にて田畠山林も段々にうりはらひ申候間。只今にては朝夕さへも凌ぎかた候所。段々の年貢の未進滞りて。只今にては金子廿五両斗りの負めに相成候所。日限延引いたし申候に付。七日以前に追分の御陣屋へめされて入牢いたし申候。此入牢の難義を救ひ申さんとて此頃品川のくつわへ。私が身をうり申候て金子廿五両かしく候様いろ／＼かけ合ひ今日其義調ひ金子をうけとり。明日は父を牢より出して。私は品川へ行申候応対にて。其金子を仏壇の下へ入れ置候間。私は廁へまいる居申候内に。前かどより忍び入りてうかどひ居申候と見えて。盗賊二人其金子をうばひ帰らんと致す所へ。私□□より□(六ウ)入り候得ば。幼少の弟を人質にとり。刀を咽へあてゝ。「声山たてると只一突」と申候故人質に心まはり居申候うちに。一人は表を明けて出申候と。今一人は弟を引立て。おもてへ出申候が。其弟を内へなげこみて走り行候。私は弟の介抱いたし居申候うちに。行方知れずなり申候。右の金子をぬすまれ候ては。父を牢より出す事あたはず。私は明日より品川へ行かね

ばならず。途方とほうにくれ申候故に。いつそ身をなげて死申候はんと。右の仕合にて候」と語りければ。真介云。「高たかで両方りやうにて五十金ごじゆうきんあれば事納をまるなれば。死ぬしぬにはおよばざる事なり。おのれ其金子かねをあたへ候はん間。まづ其方家そなたのいへへ行べし」とて。打つれて小畑の太左衛門方に至り。「此所の庄屋しやうやはいづれぞ」と問ふ。少女庄屋むすめの家ををし(へ)たれば。真介少女むすめを伴ともなひ庄屋しやうやにいたり。右の一件いっけんを語り。「不便ふびんの次第しだいなる故に。おのれ其金子かねを償つぐなひくれ候なり。少女むすめに金子かねを持もつたに盗賊ぬすびとの患うれへ在り。右未進上みぎみしんじやう(七才)納金なまきむ。只今其元ただいまそのもとへ相渡あいわたし申候間。其元そのもとより請取うけとりの一札いっしやく下さるべし」とて。金子かねをわたし一札いっしやくを取り。「さて品川のくつはへは明日あす行べし」とて。其夜そのよは小畑こばたに一宿いっしゆくし。翌日よくじつは品川しんがわに行て。右の一件いっけんを語り。金子かね相渡あひわたし。其証文しやうもんをうけ取て小畑へ帰れば。父の太左衛門も牢らうより出て其家に帰り居たるによりて。品川のくつはの証文しやうもんを出して。これを与ふれば。親子おやこは天てんに歡よろこび地に悦よろこびて。三拜九拜さんぱいきゅうぱいして躍り上りて歡よろこびぬるも道理だうりなり。真介は太左衛門に向ひ。「牢屋らうやの苦患くげんは遁のがれたるとも。これ迄の貧窮ひんきやうなれば。あすよりの凌しのぎなん義ぎなるべし」とて。又金子かね十兩取出して。「これを以て當時たうじの急きふを防ふせぎ候へ」とて。やがて立出たちいでんとす。親子おやこは袂たもとにすがりて。これを止とどむれども。「行先ゆきさき長ながき旅たびなれば」とて立出たちいでつ。太左衛門はこれを送りて路みちの二三里さんざんりも来きたれり。真介「ぜひ」とこれをとゞめつれば。太左衛門はかせのち□□□(七ウ)なくぞわかれ帰りぬ。

○真鶴真介武蔵野にて盗賊数許討とめる話

真鶴真介は東をさして行けるが程なく武蔵野むさしのに行かゝりたり。日は巳すでに山の端はちか近くならんとする所に。かごかき二人ふたり側かたはらより「旅人たびびとかごにめされよ。おのれらは。此向しむかふの宿しゆくへ帰るもの共ともなり。酒手さかて少し給はらばのせて参るべし。御案内あんないの武蔵野むさしのなれば。迷まよひ道みち数々かずかず有て。大おほひになん義ぎ為給しふなり。ぜひにめせよ」とすゝむるにぞ。「何様なにさま此野原このばら夜道よみちになりてはなん義ぎなり」とて。やがてかごにのりければ。かごかきはあしを早はやめてかきて行く。夜も早初更しんじやうにもなりぬらんとおもふ頃に。いざとてかごをおろしけるに。四方草しほうくさふかき野のばらなり。真介云。「向むかふの宿しゆくまで案内あんないせん」と

云つる故にのりつるが。こゝはやはり武蔵野のうちとおもはるゝ。なぞで宿まではやらざる」といへば。かご擗は微(八才)笑ふて。「すきな事いふ旅人かな。僅に五十疋や百疋にて。此かごが宿迄行んのか。宿迄やりてほしくば。まあ百両かへ」といへば。一人のかごかきが云。「此間小畑の太左衛門が女郎が。ほえ〜ぼやいたら。つい五六十両の金出した親方じや。一ぼんや二ぼんは。今夜のかごちゃんにもくれられさふな事じや」と。そろ〜とゆすりかくれば。真介はかごより立出て。「さてはおのれらは。此道筋の盜賊よな。尋ねても逢たかりつるに。まだ外にも同類有べし。悉く皆呼集めこよ。金子配分して得さすべし」といへば。かご擗云。「よい覚悟じや。おいらは小畑から付廻して。肩へさへのせたものじや。三百両はぎつしりと肩に覚へが有る。どりや仲間悦ばさふ」と。相図と見えて笛の音高く吹上げれば。四方の草の繁より六七人立出たり。真介は右に腰打かけて。「小畑の太左衛門が家に入りしは。かご擗二人と覚えたり。まづ汝等に酒料くれん」といひさまに。一人を車切り。□一人(八ウ)を向ふげさ。これをみて三人切かゝるを。右と左りに薙伏せ。残る一人をから竹わり。□□□三人立かゝるを。これも暫時に切り倒し。相手なければ血おしぬぐひ。打あふぎて星斗を眺め。東をさしてぞ行たりける。

○真鶴真介盜賊の家に舍りて危難に遭ふの話

真介東をさして足に任せて行けるが。道のかたへに一つ家有り。やう〜そこへたどりつきて。「行暮したる旅の者なり。一夜のやどを給はらんや」と云へば。「まづこれへ」とて内へ入れたり。亭主とおぼしきは三十有と見えて究竟の骨柄なり。外に女二人有り。よりて酒のみ居たる体なり。亭主云。「客人は夜ふけて。何方より来り給ふ」と問。「武蔵野にて道に迷ひてなん義せり。此道は本街道なりや」と問へば。「此野の中は行先によりて道数尤多し。どれ本街道と申てもなし。嚙くたびれ給はん。まづ離(九才)坐敷にて休息なさるべし。追付に支度をこしらへまゐらせん」とて。坐敷へ案内す。其家居の様子を見るに立派にはなけれども。すべて堅固にして坐敷は雨戸などしまり堅固に

り。外より見しとは大ひにかはれり。やがて夕飯こしらへて持来り。外に瓶子に酒をあたゝめさし出し、「一献めされよ」とて達而しひぬれども。「酒は一しづくも得飲ず」とて。飯のみくひて。さて飯の半ばにて厠に行たり。「けふは昼より腹けにて入りたり」とて。姑しの間に二三度も行てげり。其間に酒を嗅てみれば。かの麻薬の香ひ有り。「寝処しきてまゐらせん」とて坐敷の中央に起きたり。後にてふとんをのけ。むしろをまくりてみれば床板には穴三処まで穿て有り。「さてこそ」と。床を其まゝにしては。又もや厠へ行たりしに。「旅人おやすみなされしや」とおとなひつゝ。四方のしまりをさしぬる故に。厠より「おのれは腹けにてしば／＼厠へ行申間。しまり一処あけ置て給るべし」とて。其近所□(九ウ)窺ふに厠にならびて柴部屋有り。表家は家の左右にうらおもて通行の□□□□有。坐敷に返りて。寝所は人の寝たる体にとり。其身は柴部屋に忍びてぞ窺ひ居たるに。三更の頃に亭主ひそかに来りて。まづ厠をのぞき。さて坐敷をのぞきて。しづかに雨戸をたてゝ。外よりかきがねをかけ。しりじまりを堅くして立帰りぬ。さるに外面に松明をてらし来るが。火かけさしければ。ひそかにかの表家のひあひ路よりおもてに行てうかゞへば。門の戸をしづかにたゞく。亭主は手槍を杖につきて戸を明ぬれば。一人の男入り来て。門の内にて立ながら云には。「今宵は散々の仕合せなり。『宵に廿歳ばかりなる究竟の男一人。肌にはズツシリと金を持たる者。六郷の川はたより付てきたり』とて。『例のかご拵となりて。此野の入口にはりて。かごに載たり』と云の知らせにて。かの黄泉の辻へ。小頭二人と手下四人とはられたるが。余り音がせぬによつて。今行て見たれば都合(十才)八人ながら皆ばらされて居るによりて。其通りを魁首の権藤太殿に云たれば。すぐに手下十人つれて落合へ行かれたり。『猶も此家へ来まじきにも非れば。知れものなればゆだんせられな』と魁首の云付なり」。亭主云。「其者はこゝへ来て。已に網の中にかゝつて居るなり。めつたに逃す事にてはなし。されども小ざかしきやつにて。かの麻薬は中々くらひ居らぬなり。されども用心には縄をはれじやが。もしやこゝをぬけて出をつても。街道筋は外に逃道なし。

ぜび落合へ行かねばならぬが。只心がゝりは此うら道なり。もしや小径より山の手へぬけては取逃す事なれば。汝うら道へまはりて。かの谷川の丸木橋をだに引て置たる時には。袋の中の鼠なり。早く行て橋を引きて。あぜ道より落合へ行べし。今料理しやうと思ふて。此通りに用意せり。早く行きて。橋をひけ」とて追やりつゝ。身ごしらへして。槍やり口くちそ（十ウ）離坐敷の方へ忍び行を。やり過してうしろより大袈裟に切り放し。裏の屏を飛び越て。小径をしたひゆけば。かの男向ふに見ゆ。走りかゝればかの者立止り。ふりかへる所を切付れば。かれも知れものぬき合して二打三打はたゝかひしが。これも首より咽のあたり迄わり付ければ。仰に倒れたり。其時真介思ふ様は。「こよひは十人の余としあふて。一目も寝ざる故に大ひに勞れたり。さるに街道筋を往て。又々十人余の新手を戦はん事甚危し。さらば此径より山中へわけ入りて遁れ行ん事上策なり」とて。径を行事十町ばかりにして。谷川に丸木橋のかゝりし有り。それをわたりては山路にて。至極の難所なれども。木の根をつたひ。藤かづらをよぢて。やう／＼にして。平地に至りぬれば夜はほの／＼と明けにけり。

## 第二回

逢金而止 (十一才)

○真鶴真介常陸花園山の麓にて磊落翁に逢ふて道芸を学ぶの話

真鶴真介は市中に出て旅宿をもとめ。一日そこに逗留して。此頃のつかれを休息して。それより下総上総安房を巡り。常陸を歴覽して。花園山の麓に至れば。秋の日のつれなくて。はや暮かゝりしかば其あたりを視るに。一むら茂れる林のうちに。いと閑静に住なしたる家居の有ければ門前に立よりて案内をこひければ。十六七ばかりの少年の立出たりしに。「行暮したる旅の者。宿りを求めそこなひ迷わく仕候。率爾の至りには候へども。一宿の御無心申し」といひ入れければ。少年旅人の風情をつく／＼見て。「姑させ給へ主人に告て見申さん」とて内に入りしが。やがて出て「これへ入らせられ候へ」とて。まづ客廳に請じけり。かの少年出来りて。「折ふし風呂のわきて侍る。湯にやめ



されん」と云。「それは何よりの御展待なり」とて。湯に入りて揚れば。程なく(十一ウ)夕餉を出しぬ。かれこれしたくをはりければ。亭主出来るが。年の頃は六十ばかりと見ゆ。半白の髪をなでつけて。其威風堂々たる人品なり。客に対して云。「山林中の寒家なれば。何の展待もなく不敬の至りなり」と云。真介は「率時の御無心を申入候所。御推却もなく種々の御展待かたじけなく存候」と礼謝すれば。亭主は茶を煎させ果餌などを出して。さて客に対して云。「貴客は何処の人にて。何と申方なりや」と問。真介答へて。「相摸真鶴の里に住る。真鶴真介義則と申処士にて候」と云。主翁云。「おのれは金井帯刀義直と申者。只今は世を遁れて磊落翁と号し候。本姓は三浦にて候」といへば。真介「さてはおのれと同姓にておはし候」と云へば。主翁「貴客も三浦にて候か。さらば同宗の親しみにて候。さておのれは久しく世の交りをたちて。かくの如く引籠る事なれば。いかで往來の旅人をやどし申さんや。(十二オ)さるに先刻門外にて御案内の音声の。只人ならず聞取候故に。わざと御宿申せしなり。さるにおもはずも同宗の親にて候ひき。不思議の奇縁なり。さても此度は何方へ御通りなりや」と問。真介云。「おのれは幼年て父母にはなれ。外に兄弟もなく。いまだ妻をも迎へ申さず。祖先の余沢にて。田島山林など少しく有りて。さのみ不自由にもなくくらし申候所。当春洪水にて居宅も田島も流れ行き申候。家の代りに文蔵と申者律義にて。父の代よりめし使ひ候。此者に命じて。山林の料を以て。時々には先祖の祭りをいたし候へとたのみ置て。おのれは文武の道の修行せんとて。遍歴いたす事なれば。さして志ざす方といふてもなく候」といへば。磊落翁は。やゝ真介が顔をうちながめて云。「おのれは少弱の頃より。天文望氣監相音律風角等の道をこのみ。種々心を尽し(由摺)□□(十二ウ)中年のころ。異人に値遇して。これに従ひ学びし事三年なりしが。それよりは太略通じ給ひぬと存じ候。今貴客の相を觀るに。三体平等にして。骨格よく調ひ。肉も亦よくしまれり。眼中黑白燦然として分明なり。神氣よく納り正しく見ゆ。これ公明正大の相にして。利損失得に心を動かさず。惟義に當る所を務む。適れ正人君子の相たり。然れども流年の衝旺によれ

ば。中年の半ばまでは。不遇にして苦勞たり。中年の半より次第に發達して。晩年には大富貴を得つべきなり。これを晩福の相と云。又其氣を望む所に。一道の白氣蒸々として立昇るといへども暗氣黒氣上よりこれを壓す。これ正大の志有といへども。天命応ぜざるが故に。其望み成る事遅し。且つ其福利は西に在りて東には非ず。故にこれよりは西の国へ行給ふ事よろしきなり」と云。真介聞て。「さても(十三才)驚き入たる御術にて候。達者の觀る所其揆一にて候。おのれが故郷足柄山の奥に。如々道人と申異人の侍るが。おのれ当年の春。願ひ奉りて。終身の進退取捨の要をうかぐひし所に。かくの如きの偈文を記して給ひぬるが。其大意相同じ」とて。これを取出して見すれば。主翁「其如々道人と申は。如何なる体相の御人なるや」と問。真介いさいにこれを話れば。磊落翁手をうちて。「これ即ちおのれが三年学びし所の老師なり。三年の内に其名をさへなのらせ給はず。此花園山の石窟にまして。只端坐して在したり。これなり」と云て称歎せり。真介主翁に対して云。「世の諺に灯台下くらしと申が。おのれは其如々道人の近所に在りて。只其人の道德のいみじきのみを尊敬はしつれども。それらの道を学び伝ふる事を知らず。これ其志の厚からざるのいたす所なり。且つ道人の教へも。貴翁の論も。我志を得ん事は(十三才)中年半に在り。さらば今は道芸を学び修むるの時にして。道を施すの時にあらず候へば。なにとぞ此所に止まりて。身をくだき心を尽して。貴翁の伎術を学び伝へたく候間。御許容有て御伝授下され候はゞ千恩万幸たるべし」と。誠実面にははれて願ひければ。磊落翁はうちうなづきて。「これも天數なり奇縁なり。すでに老師の偈文にも。金に逢ふて止まれと有り。金とは。おのれが賤号の金井と云これなり。これ天數なれば。足下止まりて学びざる事を得ず。おのれも亦これを止めて教へしざる事を得ざる事なり」とて。やがてに師弟の約を定めたり。真介はこれより磊落翁の家に止まりて。天文望氣監相音律風角などの道を。次第にまなぶ事昼夜のわかちなく。寒暑を厭はず。精神を投打てこれを学び。これを思惟し。これに煉熟しつる事五年の星霜を経たり。(十四才)元來文武の道は預て鍛錬し通達せる人にし

て。其上に聡明穎悟の性得たるに。精誠をこらしてこれを学びし事なれば。其道はやく既に成就せり。磊落翁真介に謂て云。「おのれは天命薄福にして世に立ちて為る事有る事なきを知らるが故に。早くも聞達を求むるの情を断離して。此所に隱遁せり。これ世に背きて洒落にはあらず。薄福の天命に順がへるなり。又足下の如きは富貴中の人なれば。久しく此山林に立まじはるべからず。固より時運厄会の数至りぬるが故に。間なく四海は混乱の世となる事なり。これ英勇の天に代りて世を救ひ功業を樹るの秋なれば。足下の道は既に成り了れり。速かに立出で。人を助け世を濟ふの大業を務むべし。然れども今六七年は不遇にして坎途かるべし。其不遇に坎途むが。これ天より人を鍛錬して金玉にならしむるの方便たり。(十四ウ) この故に如何なる困難危急の時に臨むとも。かりにも我身をおもひ。私利を顧りみる事なくして。一に只公明正大の志を屈すべからず。けだし為る事有所の人は。天よりこれを祐く。少しも怯怖るの懦弱の念を生ずる事有べからず」と。くれぐれ懇に教訓してこれを見立て出しやられぬ。(十五ウ) (白紙) (十五ウ)

真実玉英冊の二

### 第三回

#### 望山而去

○真鶴真介木曾の山中にて怪物を射取るの話

真鶴真介は。磊落翁のもとに在りて。道を学べる事已に五年にして。其伎芸熟達せるを以て。師翁のすゝめによりて。西の国へと志して。下野上野を経て。信濃の路にかゝりて木曾の山深く入りたる所に。遙か向ふの峯の方に。一道の

羅洲逸換 撰述

黒氣立のぼりければ。「これよからぬものゝあるにてこそ」とて。半弓に矢を打つがひて。心をくぼり歩行しに。木立しげくおほひて。昼さへ路のくらき茂みにゆきかゝりける所に。一むら雨ふり風さわぎて。ひとつの怪しき物こそ出来りたる。其(一才)長けは一丈もやあらん。一身に毛生ひしげりて。山岳の險阻を飛わたる事。平地を歩むが如くなりしが。やがてに真鶴を見つつけゝん。競ひ進んで山を飛下りに走り来る。真介は其間三四十間に見なして。設けたる矢をきつて放せば。右の手にてこれを捉る。すかさず二の矢を發てば。左りの手にてこれを捉る。三の矢を放てば。口にてこれを噛とめぬ。真介心得て秘密の双矢連發を發しければ。身ををどらしてこれをさけゝるが。一矢は股に射付たり。痛手を負ながら。猶も進み来れるが。其左右の手と口との矢は。やはり其まゝにて放さざりける。真介も弓をすて、刀を抜もち。左り手にさし添へをぬき持て。これを左りの脇にかくし。近よるまゝに右の刀を以て只一討ときり付れば。ひらりとはずす所を。左りの劍にて。きり付ければ。右の肩先より胸もとへかけて六七寸切り込だり。これに弱れる所を。たゞ(一ウ)みかけてこれをしとめたり。さて其左右の手と口との矢をとりて。これを鞘にさし。其死骸を改め視るに大抵は猿と同じくて。大きな事は十倍せり。世に云所の狒狒といふものゝたぐひならんかともひながら。其死骸は谷底へ踏おとしぬ。かくて日を経て京都に至りぬ。この頃は山名細川の確執にて。都もしづかならざりけれども。西の岡に少しく知れる者の有るにたよりて。姑らくこゝに住居したりける。

○真鶴真介山名宗全が邪害を避けて京都を去るの話

真鶴真介は京西の岡に住居し。文武の道を教へ導くを以て業とせし所に。次第に門人多く集りて繁昌なりける。其頃東国方の歴々の浪人。少しくよしみ有に付て。姑らく客食となりて有りしが。真介の留守のうちに真介が(二一才)着がへを被て。真介がさしがへを佩。金子五十兩をぬすみとりて亡命したりける。真介帰りてこれを視て。「此者あり付を心がけゝる故にこのしあはせなり。さつげたらんにはこれをあたへんに。心づくしをせし事よ」とて。少しもお

どころきたる体もなかりける。其失得利損に意なき事大体これらの類なり。其脱ぎおきし古衣は下僕にとらせ。其佩刀はこれをこしらへ改めんとて研に遣しけるに。太刀は相州の政宗。さし添は松倉郷の義弘なりける。後に三光政宗。箆手切郷と称したるは。此両刀なり。かくて其名高くなりて在京の武士われもく門人となりけるが。細川勝元も其門人となりて。折々には細川の邸へも行かよひたり。或時真介八瀬小原より鞍馬のほとりまで。小鳥がりに出けるが。此日山名宗全鞍馬山へまうでけるが。其帰るさにはしなく真介と行遇ひたり。真介は狩にのみ心を入れて。(二ウ)あちこちとねらひける所に。折ふし秋の末にてとわたる雁の數十羽。行をならべて雲井をかけるを。弓に矢つがふて仰さまにこれを射たるに。はたして一羽を射とめたり。宗全これを視て。「さても弓術の達者かな。唐の楊由基にも劣らざる業なり。雲井の雁を射取とは。むかし語りにこそ聞つれ。眼前これを視しは今がはじめなれ」と称歎しきりにして。やがて一人の家来を呼び「かの狩する士の跡に付て。何方へ帰るや見とゞけて。其ほとりにて。其名も其人となりもくはしく聞合せて来るべし」と申付て立帰りぬ。山名が家来其夜かへりて宗全に申けるは。「かの士今日も暮るまで狩いたし居申候が。小鳥にても兎鹿狐にても。目にかゝりたるほどの物。ひとつも射はぶず事なく候。日くれに及びてよほどの獲ものを荷はせて宿に帰り申候。所は西の岡にて御座候。其名は真鶴真介と申(三才)東国方の浪人にて。六年ばかり以前より上京いたし。西の岡に住居し文武両道の指南いたし居申候が。只今にては歴々の門人多くこれ有り。至て蕃昌のよし。細川勝元なども入門いたされ候よし。甚だ高名なる者に候よし」とくはしくのべ聞えければ。翌日一人の使者真鶴が家に来りて云には。「我主人山名宗全申入候趣は。承り伝へ申候処。貴所には文武の道の御教授なされ候よし。仍て宗全も執心たるに付て。御講席へ出申候而。聴聞仕べく候所。政事がりの身分にて寸隙有事なし。何とも失敬の申分にては候へども。手前邸へ御閑暇のせつ御入来下され候て。御教授下され候義相なり申義に候はゞ。偏に頼み存候との義なり」。真介答へには。「不肖の某。御聞及びと有て。

我道御執心に付て。教授をも御うけなされたき旨承知仕候。よつて明後日朝五ツ時に(三ウ)参上仕べく候」と返答に及びければ使者は帰りぬ。其日に至りて真鶴真介山名が邸に至れば。宗全これを客廳に通して。慇懃に展待ける。「まづ孫子を聞たし」と申故に。其義を詳らかに説演ければ。宗全は不学の男なれども。悍雄にして理に敏き者なれば。よく其理義を会得しける。かくの如くして三四たびも参会しけるが。宗全真鶴に対して。「今表は昇平の治りたる世の如しといへども。各国武を争ふて殆んど乱世近きにあらんとす。これ英勇の功業をたつるの秋なり。足下は文武具足の英勇たるに。いつまでか民間に屈し居給ふぞや。足下文武の達才を以て。大に為る事あらば。天下たれかこれに敵し得んや。然れども足つきなくては高きにのぼりがたし。今我五百貫を足下にまゐらせて。我家の客分とせん。姑らく我により給はんや」と(四才)云。真介はこの頃宗全と参会して。其人となりを窺ふに。邪智悍雄の人がらなれば。久しく親しむまじきの人と心におもひ居る事なれば。答て云。「不肖の某を御見出しに預り。殊に大祿をも下されんとの御意。身に余り千万忝存じ奉り候。しかれどもおのれは多病の性得故に。仕官の義は望み申さず候へば。私宿にかへりごとくと思惟いたし申候上。有無の御返答に及び申べく候。只今即答にはいづれとも申がたく候」とて。立帰りぬ。跡にて宗全つくづく思ふには。「かの真鶴実文武の達人なり。これ敵に有りては怖しき者なり。意ふに細川勝元前に已に門人となれり。或は細川と先約有るが故に。今日の返答に及びつるにや。かの者もしや勝元に事ふる時には。これおのれが腹心の病ひたり」とて。やがて其腹心の家来三人をよんで此義を相議せられければ。谷川佐次郎云。(四ウ)「只今当館の武威は天下に並びなし。故に凡そ刀さゝんほどのもの。貴賤上下。ともに当家に集り入らんとす。然るに真鶴真介素浪人の事なるに。まづ五百貫の大祿を下され。客分となされんとの義。これあしらいの十二分なるものなり。まつさかさまになりて悦び躍るべき事なるに。さるに辞退に及ぶ事は。これ心中に深く思ふ所有事分明にして。細川に先約有事決定たり。又御当家の武威を見限りたるやつなり。たとへ細川に事

へずとも。当家人にては快からぬ奴なれば。これを殺害するには如じ。故に明日か明後日か。さらぬ体にて御招き有り。今一応当家の家来となるや。否やを御きめ有て。いよ／＼当家人に事へ申さず候はゞ。飛道具を以て。これを射取の手段なざるべし。たとへ如何やふなる武芸の達人なればとて多人数にてとりこめてこれを討ん事はいと容易し。もしや召とも(五才)来らずば。其住処へ多勢をさし向け討て取申さん事に。何のかたき事かあらん」と申ければ。宗全も「此議尤もなり。明後日人を遣して。外事の如く申てこれを招くべし。来らばかよふ。来らずばかよふすべし」と手当十分に命じけり。

○星野漣女恩のために機密をもらすの話

さても武蔵玉川のほとり小畑村の農民太左衛門。及び女子の漣は。夜るひるともに真鶴真介が恩徳の事を云ひつゞけにして。「もしや此世にて此恩をむくひ奉る事能はずば。来世は犬馬と生れかはつてなりとも其恩を報ぜん」とぞいのりける。かくて三年の後。父の太左衛門。病ひにそみて。已に危きに臨みて。姉の漣。弟の太吉と二人を枕のもとへよびて。「我命も已に終らんとす。汝等兄弟はいかよふにもして身を立べし。真鶴氏の恩徳は終身わするべからず」と。それを末期の遺言にして。(五ウ)終にはかなくなりけり。兄弟はなく／＼これを葬りて四十九日はりて。姉は家と諸方をうちはらひ。其あたひを以て路銀として。弟をつれて京都へぞ上りける。これは京の北山辺に。縁者の有るによりて。それをたのみに来れるなり。これを相応の郷士にて河合伝人とぞ云ける。さてそれに弟を預けて文武の修行をなさせ。姉は奉公に出けるが。山名宗全が方に事へて。大ひに主人の氣に入り。此せつにては中老をぞ勤めける。さるに此ごろ真鶴真介と云文武の達人有りといふの風説を聞つれども。「世間には同じ氏。同じ名の有まじきにも非ず。且つおのれは役がら故に。心まゝに出行事もなりがたく。もしや恩人にてはなきや」と。心にかゝり有けるところに。此邸へもまゐらるゝとの風説ゆゑに。心をつけてうかゞひけるが。果して恩人たる事を視とめ

たりし故に。万事に心をつけて居りける所に。今よひ御前へ伺ひの事有て。(六才) 次の間までつめて有りし所。なにか御密談の体なりし故。しばらくひかへて居るうちに。おもはずも。恩人真鶴真介の命にかゝる所の大事の密談なりければ。息をつめて一五二十聞とり。其後さらぬ体にて我部屋にかへり。密に一封の書を認め置て。翌日律義なる下僕をえらみ。「西山の花の寺へ心願有て代参すべし」と云付。「さて其参りがけに。西の岡の真鶴真介殿方へ。此一封を持ってまゐるべし」と。とくとひつつけてやりぬ。下僕は西の岡に至り。真鶴の家に行き。其書面をわたして。それより花の寺へぞ参りける。真介は文箱の封を被げば上書に。「大恩人真鶴真介様へ機密要用御直覽」と記して。うらに(武蔵玉川の辺り小畑村星野太左衛門が女子。星野漣九拜)と有り。其文に云。

さきに玉川のほとりにてわかれ奉りてより。はや十まりひとせのほし霜を(六ウ)過し候へども。ありしに御かはらせなきよしは。この比よそながらかひまみ奉りて。まづむねはおちぬまゐらせ候。恩人にわかれ申候而三とせの後。父太左衛門もいたづきにかゝりてつひにはかなくなりまゐらせ候。其いまはの時に。われらはからを枕のほとりへよびて恩人の義を一生涯わすれまじきの旨。くれぐれ申死にいたし申候。其後われらはからはみやこへのぼり。北山のしるべにたよりて。おとゝをたのみて文武の修行をさせ。おのれはみやづかへに出参らせ候所。此山名家へ縁有りてつかへ。只今にては中老の役をつとめ居申候。さるに此ころ御名まへをきゝまし候へども。もしや同じ名の人にてはなきやといぶかしくおもひ居り候うち。山名家へも入らせられ候よしゆゑに。いろ／＼心をつくしてかひまみ参らせ候て。其後は猶も心をくばり居り候所。此ころ主人より当山名家の客分として。御あしらひ五百貫進じられ(七才)候はんとの所。恩人のこれを御ことほりありしよしにて。我にありては千ぎまんぎにまされる人たり。外にありては怖ろしき御方故に。明日か明後日には。さらぬよしにて御まねき申上候て。其せつぜひ山名家の家来とならせらるればよし。もしや御ことわりにも及び候時には。多勢を以



て飛道具にて殺害申すべし。もしや御招き申すとも御こしなく候はゞ。多人数をもちて。御辺もとへおしよせ。ぜひとともに御殺害申さんとの調義にて候。此密談をとくとうけたまわり申候ゆゑに報恩の万分一とも存じ。御耳に入れ奉り候。恩人此山名家へ御事へなされ候におゐては事なく候。もしや此頃の如く御断りに候ては。忽ち御命に及び申候間。此書面御覧の上得と御決定第一に存候。何れ山名家へ御事へ。御心に能はず候はゞ。此書御覧しだいに。はやく他国へ御たちのき第一の御義と存候。(七ウ)人めを忍び心せかれ候まゝ用事のみ申上參らせ候めでたくかしく

真介は此書を三度おしいたゞき。「わづかの恩義にかくの如く心を尽しくれ候事甚痛み入たる心底感ずるに余り有」とて。それより二人の腹心の僕に命じて。兵具入用の品を駄荷にさせて。これを先へ持せやりて。さて諸門人并に隣家知音等へは。「本国相州へ火急の事有て罷り帰る」と云置て。其夜にまぎれて丹波路へかゝりて播磨の国へぞ落付たりける。

○真鶴真介山陽山陰の両道を遊歴するの話

真鶴真助は。京都を夜にまぎれて遁れ出で。それよりは丹波路へ行きて播州の明石姫路立野赤穂のあたりを徘徊する事一年ばかり。それより備前の国に在りし事半年。又備中の国に在りし事一年半の余。安芸に一年。出雲の都賀に住(八才)ける事四年に及び。故に其文武達才の名。中国の間に高く聞へけり。出雲に居れるうちに石見の南條家の家中も。追々に来り学びける。中にも南條左衛門と云は。老職の一人にて。志学と云所に住居してありけるが。忍びく其徳を慕ひて都賀に來りて学ばれけり。此の如く出雲に在りながら。石見の国人に門人の数多出来にければ。やがて石見の国へ引き移りて。浜田の城下にぞ住居したりける。程なく誰彼とすゝめあげて。これを領主の南條殿にこそ事へさせけれ。南條殿これを帰依し給ふ事浅からざりける。

第四回

抛石而困

○真鶴真介石見国にて士官調ひ寵臣の忌にかゝるの話

其頃南條家出頭しゅつたうの老職らうしよくに黒崎弾正くろさまだんじやうと云者あり。勇武ゆうぶにして姦曲かんきよくの狡猾しれいもあ（八ウ）なり。周防長門すほうながとの押へとして。津和野つわのの城を守れり。折々は浜田はまたに來りて国の政まつごとを聴きけり。當時の領主りやうしゆの柔弱じじやくなるを侮あなづりて。をりを以て己れこれにかはらんと云。腹黒はらくろなる底巧そこたくみ有が故に。漸そとと家中の土をなつて。腹心ふくしんとかたらひければ。炎熱あつきに集り權勢けんせきに群むらがる人情にんじやうにて。家中の土過半くははんは黒崎が一味いちみの徒ととなりける。又此度真鶴真介を吹すい上げ。徒ともは。皆義たを立て正しきを守るの輩たてなれば。これ黒崎が心中しんちゆうの仇敵あだかたきなり。さるに真鶴文武の達才たつさいを以て。領主りやうしゆを訓をしへ導みちびき。并に家中の士を取り立たる時には。己がかねての大望たいぼうの害がいたる事大おほなるを以て。心中しんちゆうにはこれを除のぞきさらんと巧たくみける。されども姦曲かんきよくのしれものなれば表おもてには領主りやうしゆをはじめ。一家中の文武の道を学まなびはげむ事を大おほに称美しょうびして。真介にも随ずい分懇切ぶんこんせつに展待あしちひける。又真介は当時出頭たうじしゆつたうの寵臣あやうしん。黒崎くろさき（九才）弾正だんじやうに謁見まへて。其相貌さうぼうを視みるに。姦雄かんゆう邪曲じやくにして。不軌ふくわい望のぞみを胸むねに貯たくはへたる事を察さつし。一此国にも久ひさしく足あしは止めがたし。領主りやうしゆは柔弱じじやくにして決断けつだんなきの暗主あんしゆたり。其寵臣あやうしんは勇武ゆうぶ悍才かんさいにして。残忍ざんじん豺狼さいらうの生れ付たり。家門かもん老職らうしよくに南條左衛門なんじやうざゑもん有りて。温順おんじゆん篤実とくじつ律義りつぎの人ひとがらなれど。これを黒崎くろさきに敵手あいてたらしむる時には。黒崎が勇武悍才ゆうぶかんさいにはあたりがたかるべし。さても氣きのどくなる国家こくかの勢いきほひなりけり」と独ひとり心を痛いため居ゐける。又黒崎弾正くろさまだんじやうはとかく心にかゝるは真鶴真介が事なれば。其腹心ふくしんの者もの教す輩はいにいひふくめて。わざと真鶴まがねが方かたへ帰依きえ信仰しんかうの体ていにて。親したしくしげ／＼に行いきかよはして。其内外うちとの動靜うご静ずをうかゞひ探さぐらせ。少すこしにても越度おちどにすべき手てが／＼りをぞ捜さがし索もとめるに。外そとにはこれといひたつべき事はなけれど。従來これまで四五年も出雲いづみに住居すまして有りける故ゆゑに。其門人かどどもの方かたより。（九ウ）折々は使つかいを來きたし。又は時節じせつの折見おりみ舞付まひとゞけ産物うぶもの等の音信おとづれは絶たえず有ありければ。此事このことを彈正だんじやう聞出きいして。これを計はかり事ことの種たねにせんとぞ思おもひ立たにける。元來もとより石見いづみと出雲いづみとは隣国りんこくたるにより其領分りやうぶん際目さいめ

の争ひより。数合戦に及びしが。兩國ともに近頃其領主代がはりにて。姑らく戦ひは止みてあれども。其意気地は互ひに残りてぞ有けるが。其頃石見の国にて。一人の盜を捕へたり。本は出雲の者なりと云。此盜賊方の奉行は。かの黒崎が腹心の徒たるが。此事を黒崎にぞ云ひ上げる。黒崎これよき手がらなりとて。ひそかに盜賊をめしよせ。これに謂て云。「盜賊は大小ともに死にたる事。此方国法たり。汝隣國の者なれば其国法は聞知りつらん」と云ば。盜賊云。「よく存知の上の義たれば。御仕置覚悟にて候。其時彈正云。「汝けなげにも死を極めたるたましひ見所有り。故に汝に一大事の用を申付るなり。よく(十才)爲了ば。一命は勿論。莫大の賞をやるべし」と。盜賊云。「已に捕へられて死を極め申上には。何等のむつかしき事にてもうけ給はり候べし。命をすて、これを為さば。出来ざる事は有まじ」と云。彈正云。「適れたのもしきやつなり。よくせば汝が立身の種なり。まづ汝が代りには。外に咎きはまりし者を刑して。世間の唱へをすまし。汝は密かに我方にかくまひ置て。一兩月を過して。汝を出雲の藩士中野五郎人が腹心の忍び使として。真鶴真介が方へまゐるなり。然るに城下の入口にて。此方の監察の手に捕へ。段々と糺すれども汝は白状せざるなり。さて其密書は小よりにして。笠のひもといたし置くが。これより其事露顯するの義として。汝は入牢さすなり。其うちに真鶴真介は敵国内通の罪をいひ立て。死罪にするなり。其どさくさのうちに。汝は牢死せしと披露して。莫大の賞を与へて。一旦出奔させ。一兩年せば。めし出して。三十貫以上の禄を与ふ(十ウ)べし。汝此事を為し得てんや」。盜賊云。「出雲は本国の事なり。中野五郎人はよく存知なり。又真鶴真介もよく見覚え居申候。随分首尾よくすべし。其笠のひも等は。よく御用意有べし」と云。彈正よろこびて。まづ此盜賊はおのが邸中にかくまひ置。さて盜賊奉行によくのみこませて。死刑極りし罪人を。出雲の盜賊として。これが跡をくらまし。さて一兩月たちて。右の用意をよく調へて。出雲より真鶴が邸へ來れる所の密使とぞす。城下の入口へ來れる所にて。監察の役人これを捕へて。盜賊奉行にこれをわたす。盜賊奉行所にて。いろ／＼と糺明拷問すれども。か

つて其実を白状せざるによりて。有司種々吟味して。遂には笠の紐をほどきて見し所に密書をばたちきりてこよりにしたるにて。一二三の相じるしにて。これを次第にならぶる時には。一紙の書面となるなり。其書面の意は。真鶴真介を岩見の国へ住み込せ（十一才）置いて。其国の油断の時節を窺ひて内通せしめ。不意に出雲より軍勢を出し。真介其軍勢を引き入れて。浜田の城を奪ひ取らんと云の調議にして。出雲の家中。中野五郎八より真鶴真介へ贈れる所の書面なり。盜賊奉行より此書面を黒崎弾正にわたす。黒崎まづ其使ひを入牢させて。さて其書面を持って御前に出て。かたはらの人を遠ざけて。密にかの書面を御目にかけて。さて申上げるは。「まさしく真鶴真介は敵国よりの回し者にて御座候。固より此義は一切に御沙汰有べからざるべし。家中過半は真鶴が門人にて候得ば。此義漏れ申候時には。真鶴を取逃し申事なり」と。領主宣ふには。「真鶴は正直の人物たり。いかでそれらの巧みごとを為すべき者とは思はれざる事なり」と有ければ。黒崎云。「それが敵国の謀り事にて候。其篤実謹厚に見（十一才）ゆる所の者にあらざしては此謀り事成がたきなり。新参の者にして。忽ちに殿の崇敬にあづかり。朝夕御前に伺公する事。豈平生の者にして。これを為し得べけんや。当御城下へ参り候と。間なくもめし出されて。只今の恩遇を蒙り申候事。これ其人者なれば。君臣これを知らざる事の候はんや。今乱世にて。人の入用の最中なるに。かれがごとき万夫不当の者を。四年五年国に置いて。うか／＼と他国へかゝへさす事の有べけんや。これは已に久しく出雲へ内分にてはかゝへ置候て。此石見の国を奪ひ取んと云の手段のために。かねて謀り置たる巧み事にて候なり」と。弁舌にまかせていひのべければ。性得柔弱不決断の南條殿のこと故に。終には其義にぞ落にける。弾正は。（十二才）「かの真介は武術の達人なれば。邸へ捕人を遣はさば。取逃す事もはかりがたし。登城出伺のせつこれをめし捕るべし」とて。我腹心の徒の中にして。武芸力量すぐれたる者數十人を択み出して。これを大廊下の左右に伏せ置。中にも心の利たる者二

人を捕人と定む。もし此二人にて手に余らば。かの数十人にてこれを捕んとの手当なり。(十二ウ)

真実玉英冊の三

羅州逸渙 撰述

○黒崎弾正奔獲を設けて真鶴真介を陥いるゝの話

さて真鶴真介は其朝御前に出んとて。身じまひにかゝり鏡に向ふて己が顔を視る所に上体髮際に黒氣横たはれり。「これ刑戮に遭の象たり。されど我に罪咎を犯せるの覚へなし。これ天數の厄会たれば。驚ろく事にはあらじ」。さてとくとこれを視れば。観骨の底に光潤ありて。それより一線の光り辺地の宮に至る。「これ外より我を助けて遠く遁れしむるなり。且つ其光線日額のほとりを経る事なれば。これ東南の方に走る事よろしとす。これも亦天命のしからしむる所なり」とて。家内の万事をとりかた付て。二人の僕を居間に招きて。「汝二(一オ)人の正実なるを知れる故に。今一大事の役を申付るなり」とて。用意の金子六百兩を出し。これを二つに分けて。各三百兩づゝを肌に着させ。武具兵器要用品を駄荷に仕立させ。これを一人の僕に命じて。「只今よりこれを追ふて。安芸国大塚まで行て。そこにて旅宿をとりて待て居るべし」。さて重代の佩刀を今一人の僕に持せて「長浜通りを往きて。十里向ふにて宿をとりて。夜の内より旅宿の門前に出て待て居るべし」と云付て。別に金子五兩づゝを路用としてわたして出行しめ。今一人の僕には「我今日登城せば汝はそれよりすぐに此一封を志学の南條左衛門殿へ届くべし。それよりすぐに暇を遣す間。何方へも身をかた付くべし。これは少しばかりなれども。餓の意なり。我は登城せば再び此邸へは帰らざるなり」と。支度十分にして。いつもの如く登城して御前へ伺公せんと歩み来る大廊下の小口にて二人の士立

向ひ。「御上意に（二ウ）て候。御尋なざるゝ義これ有り候間。佩刀預り申べく」と申ければ。真鶴真介少しも驚ろく顔色なく佩刀をわたす。二人口を揃へて云。「御吟味の筋これ有候間。吟味役所へ歩行るべし」とて。これを囲みて役所へぞりける。有司立向ひて。右の密書をさし出して。「此書面の義露頭に及び候。言ひらきあらば申さるべく」となり。真介これを視て。「此書一円に寛え申さず候。出雲の家中中野五郎八と申者。一度も面会仕候義はなく候。しかし此の如く巧みこしらへたるものは。これ己を死刑にかゝらしめんと云。根深き謀りことにて。此方は一切無心の義ゆゑに。知らずと申より外には。申わけなく候。ぜひ死刑を加へられんとならば。これ天命の至る所よく覚悟いたし申候。如何様とも仰せつけらるべし」と。神色自若して返答に及びけり。有司等。「重（二オ）て糺問有べし」とて。まづあがりやへぞ入れにける。さて真鶴が下僕は主人の供して登城せしが。今日の主人のいひぶん。何とも心得られぬことどもなれば。姑らく城中にひかへ居し所に。主人をまる腰にして吟味役所へつれ行の体を見て。びつくり驚きしが。「さらば此書状は右等の事よしを南條左衛門殿へ言遣はさるゝ要用なめり」と。宙をかけりて志学に至り。其書を左衛門殿へ達しければ。左衛門殿これを視らるゝに。「おのれ天運の厄に遭ふて。今日必ず入牢すべし。これ皆黒崎の巧み設けたる所なり。おのれが身の進退は天命に任せ申候得ば。いづれに成候ても貪着には及び申さず候へども。黒崎は國家の蠱蠱にて候間。かねて御用心なざるべく候。貴所は御家門家老の事なり。いづれにも家中は二つにわかれ申べく候。もしや黒崎と戦ひに及び申（二ウ）候はゞ。黒崎は悍武豪強の者たれば。これを破らん事は。かの秘伝の火矢にて御座候間。かねて御用意有べく候。右御心得の為まで申入候」となり。さて其使ひのものに。其時の様子を問はるゝに付。「されば登城の朝かやう／＼に申付て。此書もいまだ登城せざるうちにしたゝめてわたし置れ候。登城の上にて。まる腰にて吟味役所へゆき申候体を見うけ申候。其後の義は。存じ申さず」と云。左衛門殿聞しめして「さても／＼巧みてこしらへける事なり」と。供人こしらへて。已に本城へ行んとせられし時に。本城よ

りの走り使ひ来りて。「昨日真鶴真介御不審の義これ有りて。入牢仰付られ候所に。夜前同心星野勢平これをたすけ出して。ともに出奔いたし申候。これによりて城下の騒動大かたならず候」と注進せり。左衛門殿「さて星野勢平は俠気果決の者なり(三才)けり」と心中に感歎しつゝ、城下へとぞ出行給ひぬ。

第五回

見し星而走

○星野勢平真鶴真介を牢より救ひ出し俱に佗国に走るの話

こゝに牢獄がりの同心に星野勢平と云者有り。剛毅果決の性得にて頗ぶる俠氣有り。深く文武の両道を嗜みける。故に真鶴が出雲へ来られし初めより。深くこれを尊仰して折々には往て其道を学べり。此頃出雲より真鶴氏への密使なりとて捕へしものをよく視れば。一兩月前に捕へたりし盜賊なり。其密使の書面にて。真鶴真介うたがひをうけて入牢せし事何とも不審におもひ。つくづくとこれを按ずるに。「これ皆黒崎の姦計にて。真鶴居りて文武の両道を教授訓導する時には。家中の風儀正整(三ウ)なりゆきて。黒崎が我意を振ふの妨げたるによりて。まづ真鶴氏を斃さんと云の巧みごとなり。定て左衛門殿へこれを開れたらば。登城して此事の理非明白に正さんと為らるべけれども。其うちに牢の中にて真鶴氏を害せん事はかりがたし。国主は柔弱不決の性質なれば。何れ家中は騒動すべし。まづ事のなきうちに真鶴氏を救ひ出して。我もともに他国に走るべし」と決定して。用意の金子を肌につけ。見ぐるしきものどもをとりすて。馬ばくらう方に往きて。馬二疋をやとひ。「今宵夜半より十里ばかりの遠騎するなり。城下の南の出はづれに。四ツ時に引往て相待べし」と約し置て。日暮とあがりやに行て。「こよひ品によらば此囚人。黒崎殿にて吟味の事有べきにより。よく心をつけて守るべし」と。牢屋守りに云付置。さて城下の東の口の門番に往きて。「今宵夜半(四才)後より忍び御用に付。此門を二人罷出候間。御断り申所に候」と云置て。夜半前にあがりやへ行て。「今日の囚人黒崎殿にて内々御吟味あるの間めしつれ行なり」とて。真鶴を出して。これを引立行て。途中人なき所

にて。其縲をば解て。途中にかくし置たる佩刀を取てこれをさゝせ。東の門に至りて。「只今兩人忍び御用にて罷出るなり」と断りて。城下を立去り。それより右へ徑をとりて南はづれへ行て。兩人ともにかの馬にのりて。夜通しにはせけるが。城下を去る事十里にして駅亭有り。其所へ至る頃に。夜は明けにけり。真鶴が家来は。此所に待居て。支度等の用意有ければ。馬はばくらうへかへし。真鶴が僕と星野が僕と主従四人。芸州領の大塚までと。もみにもぞいそぎけるが。其日くれに及びて大塚に至りければ。真鶴が一人の僕宿をとりて待居たる故に。其(四ウ)所に一宿したりける。すでに石見国をはなれければ。人々安堵の思ひをなしてゆる／＼と休息す。真介星野に向ふて云。「夜前よりは万事火急の事なる故にいまだ一詞の恩謝にも及びざるなり。おのれ厄数に出遇ひて。冤の罪に陥り已に一命を喪んとする所に。はからずも貴所の慷慨義氣にして。其身上をすてゝの御加力にて。其厄を免るゝ事を得たり。これ生々世々の高恩なり」と。厚く謝せられければ。星野云。「これらの微功却つて痛入候御礼謝にて御座候。おのれは同心たれば微禄にして捨るにやすし。貴君の大恩にくらぶれば万分の一にも及ばず候。然るに不審なるは。夜前不意に先生をたすけて。東南に走る事十里なるに。其所に先生の僕これを待うけて用意よく調ひたり。又今日十五六里を走りて此大塚に至る所に。又先生の僕(五才)これを待うけて宿迄をとりて有。これは如何なる故にや」と問へば。「されば昨朝鏡にて顔色を見申候所に。髮際に黒氣見え申候。これ讒言によりて刑戮に逢ふの象たり。去るに我に刑戮に逢ふの覚へなし。さらば天運の厄会なれば遁るゝ事なしと覚悟せり。さてよく／＼観れば外より我を助けて他国に去らしむる者有の象たり。其象東南に走るに利有れば。これ東南に走ると覚悟して。此二人の僕に命じて。此二所にまたせ置つるなり。実に足下我を助け救ひ給はらんとは知らねども。人の我を助くると云の天幾を知りたるによれり」と語りければ。星野は手をうちて。「かく神に通ぜる人にして。此の如きの災難を被ぶり給ひ。且つ其御身上さへかく定らざる事。天の命数通れざる所なるべし」と。いよ／＼其妙術に帰服せり。さて星野勢平



は威儀をつくろひて。真鶴に(五ウ) 向ひて云。「おのれ今身上をすてし事は。平生の願ひ成就して。満足の至りに候。まづ大恩人はおのれを視識り給はじ。おのれは大恩人を十七年の以前よりよく視覚えてこれ有り候。今は此身になり申候故に申上べく候。十七年以前武蔵の国玉川のほとり小畑村の農民星野太左衛門が世倅太吉にて御座候。大恩人我家に來ませし時はおのれはやう／＼七歳にて候へども。父を牢より出し給ひ。姉さなみが命を救ひ。且つ品川のうきつとめをさへまぬかれしめ給へる事。父と姉との夜にひるに申くらし候事故。よく／＼幼心にも記しおぼへ居申候。その後三年過候て父は病歿したし候其末期までも大恩人のことをくれ／＼申死にいたし申候。それより姉と同道にて京へ上り。北山の郷士に河合伝八と申もの縁者のはしにて候故に。姉は奉公に出申候。私は其伝八方にて文武のけいこいたし申候て。十七の年。南條殿上京のせつ。足輕衆二三人病氣にて御手づかへのよし故に。おのれ(六オ) 南條家へ足輕に住付。国元へ御供して。其後段々とり上られて。同心と迄なり申候。これは必竟身をよする迄の奉公にて候。然る所に出雲国へ大恩人と同姓名の人來れりと申事を聞しより。早速まゐりて視申候所。大恩人に候故。飛立嬉しき朝夕にも御傍に事へ申たくは存じ申候得共。微祿の官にさへられて。思ふにまかせず候所。其後は同家中に御住み着遊ばされて。嬉しやと思ふ間もなく。此度の大變にて御座候故に。とかくの思案にはおよばず。片時もはやく牢を出しまゐらせて。ともに他国に走りて。其危きを遁れしめ奉るより外なし。大恩人の才芸を以て日本国中いづれの国へ行たりとて。岩見浜田家のあしらいを得給はん事は。うつぶきて塵を拾ふよりもいとやすし。おのれもかくの如く。安楽の身となりぬれば此うへは火の底までも御ともいたし候て。かの大恩の万分一をも報ひ奉らんと思ふのみに候。故に今日只今平生の大願成就(六ウ)の時至りぬるなり」と悦びいさみける。真介は其時に懷中より一通の書を取り出し。これを星野に見せ給ふ。星野慎んでこれを見れば姉のさなみより真介に送りし機密の書たり。真介は感涙を止めかねて。「前にはわづかの恩を施しけるに。其方兄弟姉といひ弟といひ。おのれが一

命に及ぶの大事を。二度まで救ひくれし事千恩万謝するとも飽たらざるなり。今よりは其方を我子の如くして何方迄も相伴ふべし」とて。さめぐと泣き入られけり。やゝ有りて星野に向ふて云。「今此所迄は走り来れるが。何処さして往くべきや」と有れば。星野云。「其義も昨日思惟いたし置候。遠きに至る迄もなし。隣国作州津山の城主は勇武にして仁恕たり。士を好まるゝ事寝食にも。かへらるとなり。これへ往きて身をよせ給へ」といへば。真鶴云。「おのれも昨夜より其心積りなり。幸ひに津山の家中には。二三人門人も有り。まづこれに行きては(七才)かりて見んとて真鶴星野上下五人作州さしてぞ行たりける。

第六回 縁木而立

○真鶴真介作州津山にて仕官調ふの話

其頃作州津山の城主を久世木工頭義惠と云。其本は久世三郎と云郷士たりしが。文武の達人たりし故。戦国のならひたれば隣郷隣国相互ひに侵し凌ぐ。久世三郎は勇武にして智略有り。下民の奔走に苦しむを見るに忍びざるより。傾ぶけるを正し乱れたるを治むるより。士民のこれに靡き従ふ事幼児の母を慕ふが如くにして。いつしか美作七分は其ものとなりにけり。作州の内にも新庄の城には。伯耆国名和家の重臣関主馬三千余騎にてこれを守り。折々は久世領へ働き出て侵し掠む。木工頭殿も兵を帥ひて新庄の城を攻らるゝ事数ヶ度なれども(七ウ) 城将関主馬勇略有てよくこれを防ぎて。勝を得る事能はず。又東の方土居の城には。津山より高力玄蕃辻八郎次郎に兵卒二千人をこめてこれを守らしむる所に。播州赤松家の旗下丹坂平福上月有年赤穂佐用等より。かはるゝ兵を出してこれを侵す。勝敗互ひにして年月を経たり。又木工頭殿に女子有り。英姫と云。其容貌美麗なる事世に比類まれなり。うまれつき大勇力有りて。幼稚より文武の道を好み給ひ。昼は弓馬劍槍の伎をならはし。夜は読書に眼をさらして。博く経史百家に通じ給へり。去年播磨の丹坂上月有年の徒ら牒じあはせて。軍勢六千を以て。強く土居の城を攻む。味方防ぐに利な

くして。追々加勢を津山に乞ふ。此時木工頭殿は新庄の関主馬ととり合の最中にて。進退難義の折からなりければ。此英姫望んで土居の加勢に往きて。五百の勢を以て。(八才)直ちに敵の後ろより自身大長刀を水車に回して。よりつく敵を十二騎切て落しおめき叫んで。まくり立給ふ。此長刀の前にまはるもの。馬も人もともに長刀にかけらる。故に敵はうら崩れして。色めきし所を。城中よりも討て出で。さし挟んでこれを攻ける故に。寄手散々に敗北して這々に逃行たり。木工頭殿大ひに御賞歎有て。二千貫の朱印を賜ふて。英姫を土居の城に居らしめ給ふ。故に国人これを土居の御寮とぞ称しける。これ英姫十四の年の初陣なりける。けだし木工頭殿女子に二千貫の朱印をあたへ。且つ土居の城主となされし事は。此英姫幼少の頃より純孝にして激烈の性たる故に。大願を立られたり。「今乱世の時。おのれ女子たりといへども武門に生れたり。我久世の家は父の一臂力らを以て。一代に建立なされし基業なれば。子たるもの其介抱をせずば有べからざる事なり。故に遠く他国に嫁りす(八ウ)る時には父の基業の介けをなす事能はじ。今乱世にて隣国たがひに侵し掠む。これ文武有用の時なり。故に文武通達の士有て。我父の一臂の加力ともなる人有らば。貴賤をえらばずこれに嫁し事ふべし。さなくば一生人に嫁せずして。家に在りて。父の業を介けん」といふ事を。深く父に願はれし故に。此度かくの如くにはとりはかられし事なり。英姫土居の城主となりてより。よく士民を撫育し。疾病を問ひ。困窮を救ひめぐまれし故に。士民のこれになびく事草の風に優すが如し。且つ時々には。軍勢を引ひて播州の敵地へ焼き働らきして。其武威を見されしにより。これよりは丹阪上月有年赤穂等の敵は。土居の方に向ふては面を揚るものもなく。よく治まれりける。さても真鶴真介は。星野勢平とともに。作州に來り。其藩士に吉岡兵左衛門。大井新三郎。高科弥藤太。岸(九才)根逸八と云四人は。真介備中に居りし頃に。來り學びし門人なれば。それを便りに落著たり。四人もこれを大切にあしらい。「何卒当家に有り付せん」とて。老職小原外記に其事を告たりければ。外記云。「当主は土を好み給ふ事寝食にもかへさせ給ふくらひの事なれば。用ふべき所有の

人ならば。随分吹挙すべし。まづ其人に逢ん」といふ。やがて真鶴を同道して小原に對面す。小原其相貌を見。其言論を聞に。拔群絶倫の士たれば。早速これを主人木工頭殿に告す。木工頭殿めし出して對面し給ふに。其威風堂堂として。実に国士無双と稱しつべし。やがて兵書の義理。濟がたき所四五ヶ條をとりて。これを尋ね給ふに。其義理はるかに人の意表に出て。其弁も縣河の如く。少しもよどみ有事なし。一坐の聴衆皆躍々然として飛んとするが如きのおもむきなれば。君臣一同にこれを歡びあへり。(九ウ) 故にまづ新地百貫を賜ふて。総家中文武の師範と定め給ふ。こゝを以て家中の尊敬大かたならざりける。其頃「新庄の関主馬津山領へ焼働らきし。三嶋高田の辺迄も足場長に侵し進み候」と注進す。これによりて木工頭殿軍評議有ける所に。真鶴真介進み出て云。「新參のおのれ。古參のかたがをさし置き。申上候義甚以恐れ入候得共。家中文武の師範役の仰せを蒙ぶり候事なれば。敵よせ来り候はゞ。これを防ぎ退ぞくる事これ其職たり。おのれ住着候ていまだ一寸の功をも立申さず候間。あはれ軍勢五百人を御かし候はゞ。一当あてゝ見候はん」と願ひければ。木工頭殿一段の機嫌にて。「最も願ひたれば。此討人汝にゆるすべし。然れどもおのれもこれ迄数千の軍勢をつれて。これと戦かへる事も数ヶ度に及べり。いつとでも勝を得る事かたし。かの城将関主馬は。勇智具足の者にして。中々侮りがたき所の(十才)敵なれば。軽く見る事なかるべし。今軍勢一千人を与ふべし。二の見の備へとして。高山隼人に千人を授けてこれを助けしむべし」とて。手分けに定まりける。真鶴は邸宅に帰りて。星野勢平を招きて云。「貴殿従来の文武の修行。今これを用ふべきの時來れり。此度新庄の敵深く入來つて領分を犯す。我これを防ぐの討人を蒙ぶたり。我貴殿を以て先鋒とするの間。精神を励まして功を立てし」と云は。星野これを聞て歡び勇んで用意せり。又真鶴が二人の僕及び星野が一人の僕を呼出して。「汝等三人共忠誠を感じるによりて。今日より士格に取立て。我先鋒星野が土とす。粉骨して功を立て立身をなすべし」とて。真鶴が一人の僕を愛宕助六。又一人を西岡又八。星野が僕を今木兵藏とぞ命じける。三士の歡び譬

へんにものなし。皆一命をすてゝ。此思に報はんとぞ勇みけり。かくて高田を(十ウ)さして押行所に。はしなく途中にて敵勢に出遭ふたり。星野はそれと見るより大身の槍をひねりて。当るを幸ひに突落し縦横にかけ乱しければ。星野が勇氣にあたりかねて。敵はしどろに敗北す。此時味方へ討取首数五十八級。愛宕西岡今木も各兜首一つづゝ取て。これを軍監高山隼人に見する。隼人これを帳面にこそ記しける。星野は逃る敵にひつすがふて。新庄の城のほとりまでも追かけたたり。城将関主馬は其敗軍と聞よりも。千二百の勢を帥ひて城外五町ばかり出で。陣を堅くして。敗北の味方は静かに城へ引き取らしめ。追来る敵を待ちけたり。星野は三百人の兵を従へ。烈風の雲をまくが如く。するどく関が備へに衝てかゝる。関は待設けたる新手を以て鶴翼に備へてこれを包んで討んとす。星野は鋒矢備を以てこれをうらおもてへ突き破らんとす。追ひつかへしつ。火花をちらして戦(十一才)ふたり。真鶴は少し左りへ引き退て陣を抑へて動かさず。其戦ひを見物す。星野勇なりといへども。五分一の小勢なり。且つ長途を追ひたりし勞れ武者なり。敵は多勢にして新手なり。故に星野が兵終にはこらへずうきあしとなりて。おもはず二町ばかり引きしりぞく。此時真鶴は静かにかゝり太鼓を打て。星野にかはりて二の身を討つ。真鶴おもふには。「関もなみくの士には非ず。其陣堅固なり。正を以て戦ふ時には。味方に死傷多かるべし。奇を以てこれに勝にしかず」と。しづかに備へを押し出。其間二町ばかりになりける所にて。弓に矢をはげ。敵の後陣をさして矢つぎばやに射だしければ。矢庭に三四十人射倒さる。敵勢うら崩れして陣中いろめきければ。又先陣を射倒す事三四十人。これによりて敵陣乱れ騒ぐ処を。関は采配をふり立て。「またなき味方のふるまひぞや。只一人の射前なれば何程の事かあらん。つめ(十ウ)よせて突き崩せ。引くな。かゝれ」と。身をもんで下知すれば。此詞にはげまされて。崩れかゝりし敵ももり返さんといふの勢(ほ)ひになりければ。真鶴真介。「きやつに言いはせては面倒なり。一泡ふかせてくれんず」と。ねらひすまして切て放せば。其矢関が鞍の前輪を射貫て右の股にぞ立たりける。痛手ながらも鞍に居なほらん(と)

すれども。足をふみ立る事能はずして。終に落馬せり。郎等肩にかけて城内へ引きとりければさらでだにうきあしだちたる軍勢ども。大将かくの如くなれば。散々に敗北す。星野も一息つひで居たりしが。此体を見て大返しに取てかへし。火水になれともみ立ければ。城内へ引取ひまもなく。右往左往に四方へ散乱せるもの許多なりけり。此時味方へ討取首數四百八十余とぞ記しける。(十二才)(白紙)(十二ウ)

まことのはえまき  
眞実玉英冊の四

羅州逸渙 撰述

○真鶴が勇略星野が粉骨終に新庄の城を抜き取るの話

真鶴真介は新庄の城を取り囲み。仕寄りをつけてこれを攻れども。要害無双の城に大将は勇略有り。兵糧矢種兵器等は十分に貯へたり。大石大木をなげかけ。矢種を惜まずこれを防ぎけるにより。中々急には落おすべき体は見えざりけり。元来此新庄の城は。南北は大沼にて足入りの難所たり。後ろは險阻の山につゞきて。鳥ならではかよひがたきの切所たり。真介此城の要害を得と考へ測りて。星野及び愛宕西岡今木の四士を招きて云。「此城要害堅固にして。内には勇將こもり。これを力ら攻にせん時には。味方に傷害多くして。其利少なるべし。これ迄も領(二才)主木工頭殿の。多勢を帥ひて数個度これを攻て。其功を得給はざる事は。これなり。さてこゝに此城をのりとするの一術有。其術と云は。各方只四人身輕にして。かの秘伝の火箭を用意して。さて此城の後ろてへまはり。此險阻の山をどうなりとしてこれをよぢのぼり。溪をわたり峯を越えて。行きゆく時には。かならず此城のからめてへ出ざることを得ず。さてひそかに昼のうちに其要害つまりぐをよく見置て。さて夜に入りたらばかの火矢を射かくべし。此火矢一度物に立

つ時には。必ずよく燃ゆ。もしこれを消さんとて水にても物にても。これに障る事有が否や必ず激烈して火勢甚しく。大ひにもえ上るなり。故に此火矢をあちこちと六七ヶ処に射付る時には。必ず大火となる。其火を目あてに追手よりこれを攻るぞならば前後に途をうしなふべし。さて汝等四人は城中へしのび入て。(一ウ)切て回るべし。敵はよもやかやうの小人数ならんとは思はずして。必ず同士討すべし。其間になるべくは追手の門へ至りて。門を開くべし。時には此城乗り取事やすし。これ至りての難義の役たれば。多人数にては。却つて功を成しがたし。腰兵糧は三四日の分を用意すべし」と下知しければ。四士は歡び勇んで打立たり。さて追手よりは折々軍をしかけて。絶つれなくこれを攻うごかしける。真鶴真介は平生に物聞を四方に遣し置て。其動靜を伺がはせけるが。其夜二更の頃に一人の斥候馳せ歸りて申様は。「軍勢千人ばかり伯耆の方より参り申候。定めて此城の加勢と見え申候。凡そ明日昼前には此所へ参るべく存候」と云ば。真鶴やがて高山隼人に相議して云。「明日昼前に敵国よりの加勢千人ばかり参り申候となり。我等は城を押へ申べく候間。貴君の一手は此加勢のみ御向ひなさるべく候。尤も大井高科の二士を(二オ)伏勢といたして加勢の後ろを取切らせ申べく候間。さしはさんで。一人も余さず討取の御手積りなさるべく候」と云。又大井高科両士に云。「貴所は四百の兵を帥ひて。明朝夜の中より城下を去る事半道にして。伯耆街道の右の手に。大なる藪これ有候。其藪の陰に兵を御伏せ候て。敵の加勢通り過候はゞ。其後をたち切りて。高山氏と両方よりさし夾んで。一人も泄さず討取の積りに致さるべく」と手筈を定めたり。翌日昼前に伯耆よりの加勢新庄の城近く来る所を。高山隼人が勢これを迎へて相戦ふ。加勢は長途を押来る勞れ勢なり。高山は養ひ飼たる新手なればこれを包んで討んとす。敵は包まれまじといろ／＼支へ戦ふ所に。おもひがけなき後ろより大井高科が伏兵鬨をどつと揚げて。横槍に衝きかゝれり。さらでだに色めき立たる敵の勢。伏勢うしろより起つて。さし挟んで攻たてければなじかはこらふべき。(二ウ)散々になりて敗走す。城中には後つめの加勢来れると見るより。討て出てこれを助けんとすれども。真鶴

手強く攻て出る事を得ず。且つ狭間をもことごとくに射ふさがれて。只城の中にござなり居るばかりなり。其うちに千人の加勢は散散に討なされて。残りずくなになりて。本國さして逃帰りぬ。さても星野等の四士は。陰阻の山中を夜るひるとよぢのぼりて。二日目の七ツ時頃に。やう／＼搦手の後にこそは出たれ。追手には戦ひ有と見えて。関の声矢叫びの音。手に取如く聞えけり。敵は陰阻をたのみとせしや。搦手にははか／＼しく人も見えざりける。この故に其要害よりつまり／＼迄も。とくと窺ひ得し所に。暮前より。大風大雨頻りなりければ。四士相議して云。「城内の要害は已にくはしく見ぬきたれば。此風雨に乗じて。まづ搦め手のうちへ忍び入り。役所小屋等に火をかけ置て。(三才)さて勝手よき所より二の丸へ火矢を射かけて。其中に追てへ往きて。門を開くべし。もし門を開く事なしがたくば。内より火矢を以て門を焼べし」と云ば。皆一同に「尤もよろしき手段なり」とて。難なく搦手の内へ下り立ちたり。折ふし人もなければ役所／＼へ火をつけ置て。風雨にまぎれて二の丸の際目に至り。火矢五六筋射つけ置義。追手の門に行て見れば。軍勢百人ばかり門を守りて居れども。雨風はげしき故に。各戸を開てかゞまり居る体なれば。此門にも火矢を五六筋射かけたり。然る所に搦手の役所も二の丸も一同に火の手つよく揚りけるが。風は分てはげしければ。炎々とぞ燃上りける。城内は鼎の沸が如く。「夜討入りたり。返り忠の者有り」と。くらさはくらし。同士討のみしてさわぎけり。又追手の門もえ上りて。櫓迄も火焰かゝりければ。城内の騒動上を下へと騒ぎ(三ウ)たちて。或は搦手へかけ行も有り。二の丸へ走るも有り。又は追手の門大切なりとて。水をかけてげるがいなや。其火勢激烈して其あたりの陣小屋へ。忽ち火移りてすさましく燃あがる。関主馬は矢疵重き故に保養して。居たりしが。漸々に馬に助けのせられ。二の丸迄出たる所に。追手搦手二の丸一同に燃上りて。城内は一面の火となりければ。さすがの関も惘れ入つて。「所詮此城持こらへがたし。一まづ開くべし」とて。搦手より山をつたひ峯をよちてぞ落行たる。城将すでに落うせたる事なれば誰一人踏止まつて防ぐもの有事なく。おもひ／＼に落うせたり。寄手は城内の火の手を見



るより。攻よせたる所に追手の門焼け出しければ。命知らずの軍士ども火炎の中へ飛込くして終に城中に乱れ入りけれども。支へる敵のあらざれば。やすく城を乗り取りたり。落残りし軍勢は(四才)こゝかしこに追つめてこれを討ち取りぬ。やがて火を消させて。城中を取りしづめて。士大将二人に軍勢七百人を置いてこれを守らしめて。真鶴高山星野の三士は津山へぞ帰りける。

○津山の諸士各恩賞を被ぶるの話

かくて津山勢は勇みすゝんで凱陣しける。軍監高山隼人合戦の次第を詳悉言上し。且つ真鶴氏の軍略は殆んど神に逼るものと称しつべし。はじめ城外の戦ひ星野新庄勢をかけ候つべし。勢ひにのりて攻よするを。関主馬城外にてこれを防ぎ。終に星野の勢を二町ばかりおしつれたり。その時真鶴氏は七百騎にて少し下りて陣をかため。星野にかはりて関に向ふ。静に陣を押しして。其間二町余りなるに。真鶴氏遠矢の精兵たるを以て。矢つぎばやに。敵の陣を射て。四十人許りを斃せり。こ(四ウ)れにて敵から崩れて色めく所を。又先陣を射て四五人許りを射殪す。是において敵陣敗走せんとす。関主馬采配をふり立て。馬を縦横に乗り回してきびしく下知す。これにはげまされて敵もりかへさん勢ひになり候所を。真鶴氏其物間三町にも余り候所に。ねらひ済して関を射申候が。其矢鞍の前輪を貫きて右股へ立申候。これにて関落馬いたして。其軍十分の大勝にて御座候。三町の遠間を射て鞍を射貫て股に立て。痛手故に。さすがの関も落馬仕候。これ遠間といひ。精兵といひ。堅物射ねく事。其射術神の位に至り申候。敵の加勢の至るを知りて。伏勢を以てこれを破り。四士を撰びて險阻を越しめて敵城を抜き取り申され候の神算。実に武芸。勇略。智術。三徳具足。無類の名士にて御座候。当家へよき人を御抱へなされ候義。私どもに分る迄も大幸歎喜の至りにて御座候」と申上ければ。木工頭殿大ひ(五才)に歎び給ひて。「初めは領分へ焼き働きせし。敵勢を追ひ払ふ迄の事とこそおもひてやりつるに。かの要害堅固の城を乗りとり。おのれが日頃憎しとおもひつる。関めに手

疵<sup>きず</sup>迄<sup>まで</sup>負<sup>お</sup>せて。本国<sup>おいかへ</sup>へ追<sup>お</sup>歸<sup>かへ</sup>せし事<sup>こと</sup>の快<sup>こころ</sup>よさや。これ半<sup>はん</sup>国<sup>こくに</sup>一<sup>いつ</sup>国<sup>こくに</sup>を攻<sup>せめ</sup>取<sup>と</sup>りしより千<sup>せん</sup>万<sup>まん</sup>怡<sup>い</sup>ばしき事<sup>こと</sup>なり。此<sup>こゝ</sup>軍<sup>ぐん</sup>賞<sup>しょう</sup>重<sup>おも</sup>からずば有<sup>あ</sup>べからず」とて。二<sup>に</sup>百<sup>ひゃく</sup>貫<sup>くわん</sup>の加<sup>か</sup>増<sup>ぞう</sup>にて。都<sup>つ</sup>合<sup>がふ</sup>三<sup>さん</sup>百<sup>ひゃく</sup>貫<sup>くわん</sup>となり。老<sup>かう</sup>職<sup>しやく</sup>格<sup>かく</sup>となされて。かの新<sup>しん</sup>庄<sup>じやう</sup>の城<sup>しろ</sup>の城<sup>じやう</sup>代<sup>だい</sup>たらしめ給<sup>たま</sup>ふ。次に星<sup>せい</sup>野<sup>の</sup>をめし出<sup>で</sup>し給<sup>たま</sup>ひて。「其<sup>その</sup>方<sup>たひ</sup>義<sup>ぎ</sup>は。自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の身<sup>み</sup>上<sup>じやう</sup>をすて。大<sup>たい</sup>恩<sup>おん</sup>の師<sup>し</sup>匠<sup>じやう</sup>を助<sup>たす</sup>けし所<sup>ところ</sup>の義<sup>ぎ</sup>氣<sup>き</sup>感<sup>かん</sup>ずるに猶<sup>なほ</sup>余<sup>あま</sup>り有<sup>あ</sup>。又<sup>また</sup>此<sup>この</sup>度<sup>たび</sup>の戦<sup>せん</sup>功<sup>こう</sup>。城<sup>しろ</sup>を落<sup>お</sup>せるの苦<sup>く</sup>計<sup>けい</sup>。粉<sup>ふん</sup>骨<sup>こつ</sup>の至<sup>いた</sup>れるものなれば。新<sup>しん</sup>知<sup>ち</sup>五<sup>ご</sup>十<sup>じゆ</sup>貫<sup>くわん</sup>を与<sup>あた</sup>へ。士<sup>し</sup>大<sup>だい</sup>將<sup>じやう</sup>として。足<sup>あし</sup>輕<sup>がる</sup>百<sup>ひゃく</sup>人<sup>にん</sup>をあづくるなり」と有<sup>あ</sup>りければ。星<sup>せい</sup>野<sup>の</sup>は君<sup>くん</sup>恩<sup>おん</sup>の有<sup>あ</sup>がたきを謝<sup>しや</sup>して退<sup>しり</sup>ぞきぬ。又<sup>また</sup>高<sup>たか</sup>山<sup>やま</sup>隼<sup>はいと</sup>人<sup>にん</sup>には来<sup>らい</sup>国<sup>こくに</sup>俊<sup>しゆん</sup>の刀<sup>かたな</sup>をぞ下<sup>くだ</sup>される。其<sup>その</sup>外<sup>ほか</sup>功<sup>こう</sup>に応<sup>おう</sup>じてそれ／＼に恩<sup>おん</sup>賞<sup>じやう</sup>をぞ行<sup>おこ</sup>なはれにける。(五<sup>ご</sup>ウ) 真<sup>ま</sup>鶴<sup>かく</sup>は愛<sup>あい</sup>宕<sup>たう</sup>西<sup>せい</sup>岡<sup>おか</sup>の二<sup>に</sup>人<sup>にん</sup>に。各<sup>かく</sup>十<sup>じゆ</sup>貫<sup>くわん</sup>づを与<sup>あた</sup>へて。其<sup>その</sup>家<sup>け</sup>の長<sup>ちやう</sup>たらしむ。星<sup>せい</sup>野<sup>の</sup>も今<sup>いま</sup>木<sup>き</sup>をめし出<sup>で</sup>して。十<sup>じゆ</sup>貫<sup>くわん</sup>を与<sup>あた</sup>へ。且<sup>かつ</sup>つ急<sup>きふ</sup>に京<sup>きやう</sup>都<sup>と</sup>に登<sup>のぼ</sup>せ。北<sup>きた</sup>山<sup>さん</sup>の河<sup>か</sup>合<sup>あ</sup>伝<sup>でん</sup>八<sup>はち</sup>方<sup>ぽう</sup>へ重<sup>おも</sup>く音<sup>いん</sup>物<sup>ぶつ</sup>を贈<sup>おく</sup>り従<sup>これ</sup>来<sup>まで</sup>の恩<sup>おん</sup>謝<sup>しや</sup>をのべ。且<sup>かつ</sup>つ此<sup>この</sup>度<sup>たび</sup>作<sup>さく</sup>州<sup>しゆう</sup>津<sup>しん</sup>山<sup>さん</sup>家<sup>け</sup>へ有<sup>あ</sup>り付<sup>つ</sup>き。五<sup>ご</sup>十<sup>じゆ</sup>貫<sup>くわん</sup>拜<sup>はい</sup>領<sup>りやう</sup>の風<sup>ふう</sup>聴<sup>てい</sup>におよび。且<sup>かつ</sup>つ姉<sup>あね</sup>のさぶなみ山<sup>さん</sup>名<sup>な</sup>家<sup>け</sup>につかへ居<sup>ゐ</sup>申<sup>まを</sup>候<sup>う</sup>が。どぶぞしゆびよくいとまをねがひ下<sup>くだ</sup>され。此<sup>この</sup>ものを供<sup>とも</sup>につれて早<sup>はや</sup>く津<sup>しん</sup>山<sup>さん</sup>へこし候<sup>う</sup>様<sup>さま</sup>御<sup>ご</sup>願<sup>ねん</sup>申<sup>まを</sup>上<sup>う</sup>候<sup>う</sup>」との一<sup>ひ</sup>書<sup>ふみ</sup>を贈<sup>おく</sup>りける。程<sup>ほど</sup>なくさぶなみ津<sup>しん</sup>山<sup>さん</sup>へ下<sup>くだ</sup>り来<sup>き</sup>りて。兄<sup>あに</sup>弟<sup>てい</sup>久<sup>く</sup>しぶりと<sup>と</sup>の対<sup>たい</sup>面<sup>めん</sup>。其<sup>その</sup>欲<sup>よく</sup>びいはんかたなし。かつ真<sup>ま</sup>鶴<sup>かく</sup>氏<sup>し</sup>と同<sup>どう</sup>じく当<sup>たう</sup>家<sup>け</sup>へすみ着<sup>つ</sup>ける事<sup>こと</sup>どもは。かたみにかたりも尽<sup>つく</sup>さざるよろこびは。ぶじなる事<sup>こと</sup>は想<sup>おも</sup>ひやるべし。かくて美<sup>み</sup>作<sup>さく</sup>国<sup>こくに</sup>一<sup>いつ</sup>円<sup>えん</sup>に木<sup>き</sup>工<sup>こう</sup>頭<sup>とう</sup>殿<sup>でん</sup>の領<sup>りやう</sup>分<sup>ぶん</sup>となりければ。大<sup>だい</sup>ひにこれを歡<sup>よろこ</sup>喜<sup>び</sup>給<sup>たま</sup>ひつゝ。老<sup>かう</sup>職<sup>しやく</sup>小<sup>せう</sup>原<sup>げん</sup>外<sup>がい</sup>記<sup>き</sup>に備<sup>び</sup>前<sup>ぜん</sup>兼<sup>けん</sup>光<sup>みつ</sup>の刀<sup>かたな</sup>を賜<sup>たま</sup>りて宣<sup>のたま</sup>ふには。「其<sup>その</sup>方<sup>たひ</sup>義<sup>ぎ</sup>妬<sup>ねた</sup>忌<sup>み</sup>偏<sup>へん</sup>執<sup>しやく</sup>の意<sup>い</sup>なく。真<sup>ま</sup>鶴<sup>かく</sup>真<sup>ま</sup>介<sup>け</sup>が如<sup>ごと</sup>き英<sup>えい</sup>勇<sup>ゆう</sup>の士<sup>し</sup>を我<sup>われ</sup>に薦<sup>すす</sup>め(六<sup>ろく</sup>才<sup>さい</sup>) 上<sup>あ</sup>げたる事<sup>こと</sup>。これ其<sup>その</sup>職<sup>しやく</sup>分<sup>ぶん</sup>をよく尽<sup>つく</sup>せると云<sup>い</sup>の者<sup>もの</sup>たれば其<sup>その</sup>賞<sup>じやう</sup>として与<sup>あた</sup>ふるなり」。又<sup>また</sup>吉<sup>きち</sup>岡<sup>おか</sup>兵<sup>へい</sup>左<sup>さ</sup>衛<sup>ゑい</sup>門<sup>もん</sup>。大<sup>だい</sup>井<sup>い</sup>新<sup>しん</sup>三<sup>さん</sup>郎<sup>らう</sup>。高<sup>かう</sup>科<sup>か</sup>弥<sup>や</sup>藤<sup>とう</sup>太<sup>た</sup>。岸<sup>きし</sup>根<sup>ね</sup>逸<sup>いつ</sup>八<sup>はち</sup>の四<sup>し</sup>人<sup>にん</sup>をめされて。「其<sup>その</sup>方<sup>たひ</sup>も忠<sup>ちゆう</sup>信<sup>しん</sup>にして文<sup>ぶん</sup>武<sup>ぶ</sup>の心<sup>こころ</sup>がけよければこそ。真<sup>ま</sup>鶴<sup>かく</sup>真<sup>ま</sup>介<sup>け</sup>備<sup>び</sup>前<sup>ぜん</sup>に在<sup>あ</sup>りし時<sup>とき</sup>に。他<sup>た</sup>領<sup>りやう</sup>迄<sup>まで</sup>も往<sup>ゆ</sup>きて其<sup>その</sup>道<sup>みち</sup>を学<sup>まな</sup>びたりし事<sup>こと</sup>は。これよく其人<sup>そのひと</sup>を知<sup>し</sup>りたればなり。又<sup>また</sup>今<sup>こん</sup>度<sup>ど</sup>浪<sup>なみ</sup>人<sup>にん</sup>して来<sup>き</sup>りし時<sup>とき</sup>にも。これ介<sup>かい</sup>抱<sup>ほう</sup>して。老<sup>かう</sup>職<sup>しやく</sup>にこれをと<sup>と</sup>り持<sup>もつ</sup>て。終<sup>つひ</sup>には予<sup>よ</sup>が数<sup>すなわ</sup>年<sup>ねん</sup>来<sup>らい</sup>の鬱<sup>うつ</sup>憤<sup>ぷん</sup>をはらさせし事<sup>こと</sup>も。全<sup>ま</sup>たく汝<sup>なんぢ</sup>等<sup>らう</sup>四<sup>し</sup>人<sup>にん</sup>が道<sup>みち</sup>に志<sup>こころざし</sup>の厚<sup>あつ</sup>きによ<sup>よ</sup>り。故<sup>ゆ</sup>に其<sup>その</sup>賞<sup>じやう</sup>として。十<sup>じゆ</sup>貫<sup>くわん</sup>づの加<sup>か</sup>増<sup>ぞう</sup>しで。足<sup>あし</sup>輕<sup>がる</sup>三<sup>さん</sup>十<sup>じゆ</sup>人<sup>にん</sup>づをあづくるなり」と有<sup>あ</sup>りければ。小<sup>せう</sup>原<sup>げん</sup>及<sup>およ</sup>び吉<sup>きち</sup>岡<sup>おか</sup>大<sup>だい</sup>井<sup>い</sup>高<sup>かう</sup>科<sup>か</sup>岸<sup>きし</sup>根<sup>ね</sup>の四<sup>し</sup>士<sup>し</sup>は勿<sup>もち</sup>論<sup>ろん</sup> 家<sup>け</sup>中<sup>ちゆう</sup>一<sup>いつ</sup>統<sup>とう</sup>に。殿<sup>でん</sup>の

士を愛し給ふ事。且つ其賞罰の明らかなるに感じ服しける。かくて真鶴真介は軍勢五百人を従へ。新庄の城の守護に(六ウ)打立んとす。よつて殿へ願ひけるには。「星野勢平義。おのれ出雲に在りし時よりの門人にて。大抵は我道をも會得いたし居申候間。我等新庄守護の其間は。星野勢平を以て我等が代として。家中の稽古都かし申たし」と申上ければ。殿は殊に欲び給ひて。「よくも心づきたり」とて。「星野勢平義は。真鶴真介が学頭たれば。真鶴新庄守護の間は。家中一統に星野勢平を師としてこれを学ぶべし」とぞふれ示し給ふ。且つ吉岡大井高科岸根の四人を二人づゝ一月代りに新庄へ遣して下役たらしめ給ふ。これは此四人によく真鶴が道を修行させんといふの。御賢慮にてぞおはしける。かくのごとく殿の仁恵は土民に遍ねくて。一国ともに文武の道を学び心がけゝる故に。久世殿の威風は日夜に高く盛んにぞなりまさりける。(七オ)

第七回

從道而学

○玉繩小太郎幼稚より母のいさめに従ふて如如道人の許にて道を学ぶの話  
こゝに相摸国玉繩の里に彦六といふ農民あり。其女子に生実といふ者有りて。容様いとうるはしく且つ貞烈の性得たり。十四の歳より同国の豪家にめしつかはれて有りしが。十六の歳に。其主人の家に大変有りし故に。からうじて其危ふきを免かれ出で。玉繩の親のもとへぞ帰り居れり。其時に主人の種を身にやどして三月にぞなりけるが。程なく月みちて。玉の様なる男の子を生たり。これを玉繩小太郎とぞ名づけける。祖父祖母の欲び大かたならず。生実は其子を大切にそだて居りしが。人をもつて主人の家の安否を尋ねきかしむるに。「主人はそれより文武の道の修行せんとて諸国遍歴して。(七ウ)とんと帰り来たらず」と云。さて生実は田舎に稀なる所の美人にして。歳はやう／＼十六七のことなれば。かれよりはもらはん。これよりはむかへんと。仲人の出入夜をひる絶間はなかりけり。されども生実貞烈の性得にて。「いづれ此子を守りそだてゝ主人の家を興さん」と云の志なれば。一向にとんぢやくにはおよびざ

りける。さてとし月うつりかはりて。はやくも此子七ツになりける時に。生実祖父祖母に対して云。「此小太郎をして主人の家を継ぎ興さしめんと思ふにつき。文武の道を学ばさしめんと思ひはべる。さいはひに足柄山に如々道人と申て智行兼備。文武俱通の異人ましますによりて。其御もとへ託しあづけまゐらせんと思ひさだめ候なり」といへば。祖父祖母はあきれて。「それらのことは此子の十六七にもなりその後の事なり。まだ七ツや八ツの小児をば。たれかこ（八才）れをあづかりてくれんや」といへば。生実云。「其十六七の時には連れ世に出て。為る事あらしめんと思ふによりて。七歳より学び事なさしめずば有べからざるなり」といふ。生得いひ出したる事変ぜぬ娘の氣質を知りぬひて居る事なれば。祖父祖母は。「そちが生たる子の事なれば。如何やうともころ任せにするがよきなり」といへば。やがてて其児小太郎をつれて。はるく足柄山へと出行ぬ。さしもけはしき山路を。其児を背に負ひてゆきつやすみつして。やうく道人の在す庵室のもとに至りぬ。門辺より膝もてにじり入りて。「老師に一つの御願ひ事有て参りたる者なり。あはれ御慈悲をもて御聞入下され候はゞ。生々世々の御恩徳ならん」と。涙とともに願ひける。道人は女子に對して。「如何なる願ひなるぞ。叶ふべき事ならば叶へ（八ウ）得さすべし。其願ひとは如何なる事ぞ」と問はせ給へば。其時に生実は流るる涙を払ひて。「妾は当国玉繩の里の農夫。彦六と申者の娘にて候。十四の歳より或家にみやづかへいたし居申候所。十六の歳に其家に大変有りて。やうく其所をのがれ出て。親の里玉繩へ帰り居申候。其せつ主人の種を身に胎し居申候が。程なくこれを生み申候所。即ちこれなる童子にて御座候。尤も主人も其まぎりより他国致されて。今に帰られず候よし。故に妾が志は。何分にも此児をば文武の達人に為し上げて。其主人の家を興復させんといふの願ひのみに候。何とも恐れ入候得共。今日より此児を御弟子となされて。御教授下され候はゞ。たとへ妾は身を碎き骨を粉にするともいとひ申さず候」と身命を投うつてぞ願ひければ。道人はやゝ姑し其児を眺め入りておはせしが。（九才）ほくくとうちうなづかせ給ひて。「此小児よく教へなば。よく学びゆくべき

の者なり。貧道今日よりたしかにあぶかりてこれを教導すべし」とて。すなはち玉繩小太郎義起とぞめされける。さて母に対して宣ふには。「此児いまだ幼稚なれば。中々急には其道達しがたし。まづ我庵りに居る事十年せば。其道かならず成就すべし。故に此子十七歳の春には迎ひに来るべし。それよりは世に出て大に為る事有べし。其父よりは福力有りて発達する事速やかなるなり。さて汝はとく帰らね。深き山の中もしや夜に入りては。女子の危ふき事なり。此児の事は貧道あぶかりたるのうへは。少しも憂危ぶむ事勿れ。丈夫に安心して。父母によく事ふべし」と有ければ。生実(なまみ)は三拜九拜してあつく道人に礼謝して帰らぬ。かくて生実(なまみ)は父母の(九ウ)家にあつて。紡績機織裁縫の業を務めて。其余精を以て。小児の衣類調度より。道人のめし料をも。時々にはこれを持はこびてさくげたてまつり。かつ洗ひ洒ぎして。これをめさせかへる事少しもおこたる事なく。寒さ暑さのいとひなくして。やがて十年のとし月をぞ送りける。

○玉繩小太郎如々道人の許に有る事十年にして文武の道三才の妙義悉く皆通達するの話

さても如々道人は小太郎をあぶかり給ひしより。木に弦して弧となし。木を削りて矢となして弓射るわざを教へ給ひけるが。はじめは其的を三間五間の近きに置いてこれを做はしめ。熟するにしたがひて次第に的を遠くして。後には數十間数百間の遠間に通ぜしめ。的は段々に小さくして。後には(十才)五分三分の小的にして。当りの細かなるを熟させ。それよりは聖物を射貫しめて。これも後々には数百間の向ふなる。いく抱へに余る生樹に小的をたて。其生樹を心よく射通しけり。よりて射の道は。精細より長間。聖物。三つながら通達せり。又木を伐りて木刀として。太刀かきの伎を学ばしめ給ひしが。これも後には。かの木刀を以て。数十丈高き樹の末の條を。飛上りてこれを切り落すのかるわざにいたり。又木を削りて槍となしては。これを使ふ事をしへ給ひつるが。後にはこれも神の位に至り。時々には猪熊をたやすく突きとめ。それを獵夫にやりて。其かはりに馬をかりて。岩石の山道をはせ引きする事をを

しへ給ひつるが。それも後には熟練して。十間二十間有る所の断谿をすきに飛こゆるにいたれり。さて又夜分には経史百家の書を讀しめて。次第(十ウ)に天地人三才の義理を余らめしめ。又其かたは天文望氣風角音律等の術ををしへ。六韜三略孫子吳起が覇術。兵家の要道を伝へ。且つ仙家秘伝の火箭の法を口授し給へり。これは其製作の分量至つてむつかしければ。しばしこれをこしらへさせて。これを試みしめ給へり。かくの如く習練せしめ給ふ事已に九年に及びて文武の両道已に其大要は通達せり。已に十年目に至りては。諸余の業を姑らく閑きて。専ら運心定力の工夫をなさしめ給へり。其工夫功成りぬる上にて。かの四聖相承の周易の神道を伝授し給ふ。此修行に至りては昼夜寢食の間断なく。肢々汲々の勉め。鍛鍊琢磨の励み。一百日の満日に至りて。漸く其肯綮にぞ至りける。道人小太郎に宣ふは「汝天地の間の道。悉く皆神易の中に備はれる事を会得しぬるや。(十一才)さらば天地の間の道といふ道。すべて皆時の一字に帰せる事をよく点頭すべし。故に万般の功業の成熟する事は。人事の務めと天時の幾と相符号するに在る事をよく了会すべし。今汝が道すでに成れり。これより世間へ出て其術を施して。世を扶け人を救ひ。徳を積む事を専ら心とすべし。汝はこれより西の国に縁有れば。西の方へ往くに利し。さらば立身も速かにして一二年のうちに發達する事を得べし」と命じ給ひ。母の生実を呼びよせ給ひ「汝が子の小太郎義起が道。已に成り了れり。故に今汝に帰し与ふるなり。とくつれて下山すべし」と有れば。親子は歡びに堪ずして。千恩万謝をのべて。あまたゝびぬかづきして下山したりける。(十一ウ)

真実玉英冊の五

## 第八回

## 乗馬而進

○玉繩小太郎西国に往く途中。奔馬に遭ふて立身するの話を作州津山の城主久世木工頭殿は質素謙恭にして。士民を愛恤給ふが故に。国富民饒かにして。其武威四方に覆へり。真鶴真介新庄の守護となりしより。伯耆国に段々と手いれせしかば。北は橋津長瀬より。西は倉吉大山の麓に至り。東は吉原より因幡界に及ぶまで。悉く皆其武威に服し徳化に感じて。靡き従ふたり。さて其頃に奥州の小南部の牧立に。長けは七寸ばかりにして。尾花あし毛の馬有り。上悍無双の駿足なれども。これを乗り得る人少し。故(一オ)に仙台にても関八州の諸家にも。これを買ふ人なきより。東海道より五畿内。山陽道までも牽き来りて。これを津山家へぞ見せたりけり。木工頭殿御覽じて「連の駿足なり。乗りむつかしければこそ。はるぐ此国までも牽来れり」とて。これをもとめられけり。さて家中の士に段々と乗らしめ給へども。乗ずまひしてよせ付ず。たまぐ乗り上りたるも。馬場二遍とはわたらずして。必ず勿落す。前立はやく後勿するどなり。それもこらへて乗り居る者は。必ず牙にかけて敗れ出す。其迅疾事疾風の如し。故に如何なる鞍強といへども必ずうち落さるゝことなり。一家中の士もあぐみ果たるよし。土居にも聞えければ。英姫其馬を殿にこひて。此方にて乗らせて見るべしとて。これを牽せらるゝに。八人の中間の中に引立来るの悪馬なり。土居城外に二百間に幅七間の馬攻場有り。(二ウ)これにて其馬を攻せんとて。土居御寮家中をつれて馬見所に出給ふ。誰彼と馬に名を得し者三三人。立ちかはり入りかはりて乗りつれども。馬場二遍とはわたさざりけり。こゝに内藤総太とて。大力無双の士にて。身の長け六尺有余弓馬の伎に長ぜり。やがて此馬に乗りて馬場二遍わたりて。三遍めの隅の口より。牙にかけて馳出す。内藤これを止めんとて左りへつよく折を取れば。馬は右の衿を出しさまに内藤を打殞して。敗れ気になりて。屋舎樹林田畠の差別なく荒にあらでぞ放逸たり。さて玉繩小太郎は祖父祖母母に暇を乞ふて。師のをしへに従ひ。西の国へと立出で。東海道より五

畿内を経て。播磨の明石姫路のほとりにて。西国大名の風儀を聞合す所に。作州津山の久世家こそ。実に土を愛し好み給ふといふ事を聞て。(二才) まづ津山に行て見んと。赤穂より有年上月を経て。作州領に至らんとする所に。向ふより一疋の放れ馬。敗れ氣になりて狂ひ来る。小太郎心におもふには。「此馬此まゝにて放ちやらば大ひに人を傷ふべし」とて。馬のかけ来る向ふへ立て、大手をひろげてこれを支ゆ。馬は人を見てこれをくらはんと飛かゝるを。両の轡に手をかけて。これを押へ止めて。まづ馬の氣をしづむる事姑らくなり。其後かたてに轡をとり。片手にて馬のひら首をさすりてこれを撫恤すれば。馬はよく落付て馴れ服せる体なれば。これにひらりと乗りて。「馬の来りし方にぞ乗り行ば。かならず馬主追ひ来るべし。幸ひにおのれも土居の方へ行事なり」とて。半道ばかりにて。五六人追々に馳來りて。小太郎に対して。「馬場の攻馬風と放れ申候て。貴君の御苦勞にあづかり(二ウ) 申候。よく御止め下され候段。忝存候。何卒御返し下され候や」と申せば。「随分御復し申べく候。定めて馬主追ひ來り給はんと存候て。馬の来りし方へ乗り参り候。さらば御うけ取なさるべし」とて。馬を引きわたしけり。おさが繩を四筋までかけて八人してぞ引て帰れり。其中に一人仁体らしき士跡にのこりて。小太郎に向ふて。「貴君は何方の御人にて。御名は何と申候や」と問ひければ。「我等東国かたの浪人玉繩小太郎と申て。諸国を遍歴して身上をかせぐ者にて候。作州津山の久世殿は。すぐれて土を好まるゝよしの風聞故に。久世家には。我等の如きものにも。もしめし置るゝ事もやと。作州津山へと罷こし候なり」と云ければ。彼者云。「我等即ち津山の家中奥村吉作と申者なり。成程主人木工頭土を好まれ申候間。御縁だに候はゞ随分有つき出来申べく候。実(三才) は只今の放れ馬は。近頃主人牽せ申候得ども。乗りむつかしく候。今日も馬場へ出して乗申候処。乗り人を打落してきれ申候なり。さるに途中の放れ馬をよくもひとり乗りなされて。これ迄めされ候事。馬芸の達人と存ぜられ候。此一道のみにても随分有付は出来申べくと存候間。まづ我等と御同道なされて然るべし」とて。これを導びきて土居へいたりける。此時に英姫は「攻め馬馬場を放れて佗領



へかけ行て。敵国へこれを取られん事は。武門の恥る所なり」とて小具足して馬に打のり長刀かひ込んで。城下はづれ迄出給ふ所に。馬を引きて帰り来れりと御聞有て。やがて馬場へ入らせ給ふ。つゞひて厩やどりの役人ども罷出候而申上げるは。「放れ馬を追行候事一里半ばかりにて。向ふより十七八歳と見えたる究竟の美少年。此馬にのりて静かに地道を(三ウ)打せて来る故に。放れ馬の理りを申候得ば。早速これを返しけれ申候」と。申上げる所へ。奥村吉作罷帰り。「さてかの馬を乗り止めくれ候士の。出身姓名を承り申候処。東国方の浪人玉繩小太郎と申人にて。有付かせぎの為に四方を遍歴いたされ候よし。此せつ御当家に士を御好みなさるゝの風聞を伝へ聞申故に。わざ津山の方へ罷こし候所に。放れ馬に遇ひ申たる故に。人を傷はん事を憂へて。これを取り止め。『定めて馬主追来らんと推察して。馬の来りし方へ乗り参り候』との事故に。まづ同道いたし。かしこにまたせ置候。其人品は適れの英勇と見え申候。まづかの悪馬のきれ出して狂ふを。途中にて独り乗りして。地道を打せ来り候。其馬術にてさへ一道の妙を究めたる人と存ぜられ候」と申せば。英姫宣ふには。「当家を望(四オ)て来れる人。龜抹にあしらふべからず。且つ汝其人に申さんには。『旅途の御労れも候はんかなれども。右馬引き入れ申てより。十四五日にも相成候へども。家中に乗り得たる者なくて入り入候。何とぞ一馬場御攻め下されたし』と尋て見るべし」と有ければ。奥村吉作小太郎に対して。土居御寮の口上をのべ。且つ申には。「当所の主は津山の主の惣領女子にて英姫と申候が。文武の道を好みて。一昨年播磨の上月有年丹坂の敵。多勢当城を取まき戦ひなん義たりし時に。此姫十四歳にて加勢を致され。敵を追払ひ申され候より。此城を姫に賜ふて敵国を押へ居申候。乃ち只今当城主馬場に居られて。御乗馬拝見いたしましたしとの義に候」といへば。小太郎「やすき御事何時にても乗馬いたし申べく候」との返答なればすぐに小太郎を伴ひて馬場にぞ至りける。さて(四ウ)馬見所には正面に英姫。左右には家中の歴々威儀を正して並居たり。又旅がけの少年の士。かの悪馬を乗といふ事を聞て。一家中の士は。馬場の四面をとり囲んで。片唾をのんで見物

せり。小太郎は乗馬支度をして。馬場に立出る其骨柄。歳は十七八と見えて。身のたけ五尺八寸。中肉にして色白く毛髪黒く。威風凜々として愛敬深し。何れ英勇の美男子たり。静に馬見所の方へ式礼して。馬の傍らにより。我神氣と馬の神氣とを。目よりこれを通ぜしめ。静かに乗上りて。ことごとくに繩をとかしめて。地道三遍のりて。六法より小乗り早乗り三四遍づゝのりて。地道に乗りもどして。すでに下りんとする所へ。奥村吉作出来りて。「見事の御乗り風態。当主も甚感心いたし申候。しかしかほどの悍馬。今少し足深く候はんかと思はれ候。逆もの事に御(五才)遠慮なく。十分の足いろを御出させ下されたしとの所望にて候」と申ければ。「かしこまり候」とて。すぐにのりに移りて早乗りより。急に位につめて。それよりはむかふをくれておろし足。乱れ足。立波足等。十二分の足を出させて。さて逸参がけを逐ひし所に。其はやき事二百間の馬場をかけるに。目をふるのいとまさへなかりしなり。それより輪をのり。りうぐをのり。折をとり。すさをいれて。地道二三遍のりてぞ下りたりける。家中の上下おもはず声をあげて。「乗たり乗たり」とのどよめき。しばしはなりも静まらざりけり。奥村吉作玉繩に向ふて。「当主申候には。御がけの途中。御草臥にも有べき所。わりなき御所望申入候て御苦勞に存候。まづ御旅宿申付べく候間。ゆる／＼御休息下さるべし」とて。同道して下宿にぞ至りける。種々丁寧なる展待にて。ほどなく使者来りて(五ウ)「今日は放れ馬これ有り候所。御苦勞に御乗り留め下され忝存候。并に又候御乗馬の御所望申入候処。無類の悍馬。觀事の御乗立。御芸術の至り。感心仕候。右の趣き本城へ申遣し有り付の所。御推挙申入べく候間姑らく御逗留なされ候。随て時服一重。黄金百両。聊今日の御苦勞御慰勞の為迄に進じ候」との義なれば。小太郎これを頂戴し礼謝をぞ述にける。

○小太郎津山にて文武の試を経るの話

玉繩小太郎が事本城に聞えければ。木工頭殿いそぎ其人召て対面有べしとて使者をたて、これを招き給ふ。小太郎使者

とゝもに津山に來りければ。大書院にて対面有る。木工頭殿これを見給ふに。まだ十七八歳の美少年たりといへども神氣よく納り充ち。舉止整肅。威風堂々として。一方の大將たるべきの(六才)器量たり。やがて問て宣ふには。「貴所は少年たれども。文武の道に長じて。諸国を遍歴せらるゝのよし。此ごろ家中の悪馬を乗り上られたるのよし承り及び候。さて文学の所。何とぞ一応御演述にあづかりたし」と有ければ。まづ孫子をぞ講じたりける。其弁泉の湧き出るがごとく。聞者皆々心酔せり。さて講じ終りて申けるは。「孫武は覇術を以て主とせるが故に。かくの如くに説き演ぶるといへども。其究竟の要は。忠信の二字に帰し申候事なり。凡そ天地の間に有りと所有道は。神易の大道中に悉くこもり有る事にて。其余の書はすべて其時に當りたる所の事を書のこしたるものにて候。莊周が芻狗なりといひしも激論のみには非ざる事なり」と申しのべければ。一坐君臣ともに感服せり。木工頭殿宣ふには。「文学の義は粗其旨を得申候。しかし深遠の(六ウ)義たれば。一朝一夕にて了会すべき事にて非ず。此方の力ら足らざる事なれば。ゆる／＼学び申べきの心底にて御座候。又武術の義は。初心の者といへども一見に其勝敗わかり申候事なれば。家中の者共に帰依信仰さすべき為に。御武術のほど。一応御見せ下されたし」と有ければ「武芸の術は相手を取て其勝敗を見せ申候事にて。其負たる方快からぬ者にて候へば。入り入りたる事にて候。されどもこれを辞し申候時には。人の信仰も起らざる事なれば」と。姑し案じて申様は。「我等此庭上に坐して居申べく候間。御家中の精兵の射人を両三人御より出し有て。我等を射させ給ふべし。われらこれをうけそんじ候はゞ。これおのれが芸の未熟にて候。又これをうけ得たりとも。これ射人の拙劣にも當り申さざる義にて。おのれより彼を傷ふ事なれば。此義は如何有(七才)べくや」と申ければ。木工頭殿。「坐しながら飛道具を防ぎ候事は。これ神位の芸なり。しかしあやまちて貴所に傷つく事あらんも如何」とあれば。小太郎云。「おのれより申出して。其矢にて一命を喪ひ申候様なる。未練の芸にて。他家へ罷出て。文武の道を以て。有りつき候はんと申候事は。横道の至りにて候。早々仰付られ下さ

れたし。士さぶらひの一旦人中いつたんにて申出したる義。如何に御うばひ下され候とて。御意ごいにあまへて止まり申べき事ことにてもなく候」と。詞ことばを放はなつて申ければ。此うへはとて。家中ちやうちゆうにて精兵せいへいの射人てと名なにしあふ。田中弥重郎たなかやじゆうらう。乾作内いぬめさくないの二人を撰えらみ給ふて。これに矢三本やさんぼんづゝを下されぬ。玉繩たまづなは広庭ひろにはに席せきを設まうけてこれに坐す。其間あいたを隔へだつる事十間じつけんにしてこれを射みる。田中弥十郎御前たなかやじゆうらうごぜんに向むかひ式礼しきれいして立向たたまかひ。矢をつがふて引しほり。ねらひをかためて切はなて放はなす。其矢過あやまたず。玉たま(七ウ)繩づなが胸むねに來りけるを。右の手にてこれを握にぎり止とどむ。續つづひて二の矢咽やのどをさして來るを。左の手にてこれを握にぎる。三の矢は面おもてをさして來るを。右の手にて静しづかに握にぎりとむ。田中は一揮いちゆうして退しりぞく。乾作内いぬめさくないかはりて射せんる。これも三矢さんしともに手にて握にぎりとむ。此時家中しよしの諸士しよし思はずどつと声こゑを發はつしてこれを普ほむ。其時木工頭殿諸士しよしに對たいして。「此人家中しんの師範しはんたるべきや否いなや」と有ければ。一同どうに「豈此人まさに賢さかれる人の有らんや」と申上る。よりて小原外記せいはらげに命じて。まづ当分たうぶん足休あしやすめの料りやうとして。百貫ひやくくわんの墨付すみつきを下され。「家中文武ぶんぶの師範しはん役やく。真鶴真介まづつみまゐと二人してこれを勤つとむべし」と仰うや出され。邸第やしきを下されて。これに引き移うつりて住居ぢゆうしけり。其日後あとにて星野勢平せいのへをめされて。「玉繩たまづな小太郎せうたろうが今日こんにち文学ぶんがくの理義りぎ。如何いかに聴取きとりし」と御尋ごたづね有ければ。星野慎せいのんで申上けるは。「今日こんにち玉繩たまづな(八才はっさい)氏の孫子そんしの講術かうじゆつより。其後あとにて文学ぶんがくの大意たいいを説とき演えんべられ候義ごうぎ。我師われし真鶴真介まづつみまゐ平日へい日教にちかうへ論ろんし候旨むねと分寸ぶんぷんも違ちがひ申さず候。其上得かみうと聴聞あやうもんいたし候所ところ。玉繩たまづな氏うぢの方演説えんせつくはしき様に承うけり申候。且つ飛道とびだう具ぐを防ふせぎ申され候に。其身み少すくしも動うごかず。其矢やを握にぎり申され候事こといと静しづかに見え申候。神氣しんきの納おさまり。所詮しよせん人間にんげんの境界きやうがいにてはなく候。君の御前ごぜんにて候故ゆゑに。実を以て申候時ときには。真介まゐよりも一際ひとときまさり候かと存候」と申上ければ。木工頭殿大だいひに勢平せいのへを御賞美ごしょうび有て。「汝せは正直せいちよく剛美かうじゆつの士しなり。其好このむ所に阿おらざる所。感心かんしんの至いたりなり。予よもさ思ふ事ことなり。真介まゐは人間にんげん中の一人ひとりなり。玉繩たまづなが道みちは殆ほとんど神しんに至いたり。世間せけんにはこれが敵あいて人有事にんあひてなし。予よは如何いかなる宿世しゆくせの果報くわほうにて。かゝる名士めいしどもを。一人ならず二人ならず。汝せを合あせて三人迄得よつる事ことよ」とて。嬉なみだし涙なみだにぞくれ給ふ。星野もかたじけなき御意ごいを蒙かかりて。これも同どう(八ウ)じく歎よろこび涙なみだに

くれにける。木工頭殿「今日の首尾。土居に行くはしく、英に申聞すべし」とて。星野を使者として土居へぞ遣されける。

第九回

得日而昇

○玉繩小太郎赤松家の勇士日根野を討取り西播を帰服せしむるの話  
此頃播州の赤松次郎は五著に居城せしめて。其勇臣日根野中務をして。佐用の城の守護たらしめしが。これに命じて作州の土居を攻しむ。日根野三千の兵を帥ひ。其他平福上月有年赤穂丹坂の兵を催促して。都合一万余の兵に將として。土居を攻んとす。此事津山に聞えしかば。木工頭殿諸士を聚めて評議有る。玉繩小太郎進み出て申様は。「播磨の赤松悔りがたきの敵なり。殊に日根野は赤松家随一の勇將たり。今度一万の多勢を催促して土居を犯すものは。ぜひこれを攻ぬかんといふの調略たり。(九才)然れども土居殿勇智にましませば。要害無双の城によりて。これを防ぎ給はんこと随分氣遣ひ有まじく存候。願くばおのれに軍勢千人をかし給はゞ。これを帥ひて土居の加勢にはまゐらずして。北の道より日根野が本城の佐用を攻めぬかんとすべし。然らば日根野土居をすて、本城へ引取り申べく候。其時土居の兵とこれをさし來んで攻破り申べく候。同じくば此ついでに平福佐用上月有年赤穂丹坂等を。攻め取か。降参さするかして。永く東の方の憂へを除き申たし」と述べければ。木工頭殿これに従ひ給ひて。高科弥藤太岸根逸八田中弥十郎乾作内の四士に。軍勢五百人を従へて土居の加勢としてこれを遣はされ別に星野勢平に軍勢千人を従へしめて。これを玉繩に授けて中入の手筈をなさせ給ふ。玉繩はひそかに北道より佐用をさしてぞ急ぎける。赤松勢老万騎土居に押よせ。無二無三に攻かゝる。城中は静まりかへつて(九ウ)敵を十分に引付けて。出し櫓高櫓より。さしつめ引つめ散々に射かくる矢に。沓の子打たる如き敵なれば皆的になりて。やにはに二百人ばかり射倒さる。され共多勢なれば入かへてこれをせむ。已に塀下によれる所を。大木大石を投かくれば。押にうたれて死するもの数を知らず。寄

手これによりて辟易して少したゞよふ所を英姫土屋五郎井上太郎作。有馬三八坪井兵太夫等を左右に從へ軍勢五百人まつ黒になつて。上月有年赤穂の勢に打てかゝり。例の大長刀にて敵を左右に薙落す。寄手これにかけ崩されて散々に敗北す。日根野これを見て新手を以てこれに当らんとはせ来れば。早城中へ引取けり。日根野大ひに怒りて強に城を攻んとすれば。矢石を以てよくこれを防ぐ故にぜひなく引取て。向ひ陣をぞ取にける。英姫其夜高科岸根田中乾(十才)の四士に。各三十人づゝを從へて敵陣に夜討せしむ。「軍をしたるくすべからず。驚かし騒がすまでなれば。軽く引取べし」と下知し給ふ。高科は上月の陣。岸根は有年の陣。田中は赤穂の陣。乾は丹坂の陣におしよせたり。「寄手はよもや今夜は夜討などは有まじ」と。昼の勞れに前後も知らず寝入たる所へどつとおしよせ。面々投松明を以て陣屋を焼立ければ。四陣同時にもえ上る。「すは夜討なり。火事なり」と。うろたへさわぐを。切り立て十分の利を得て。手がろく合詞を以て引取たり。日根野は陣を固めてこれを守り。敵かゝらばこれを討んと待居たれども。敵も来らず。四个所の陣は各同士討にて夜を明したり。翌日は夕べの夜討の恥を雪がんと。赤穂丹坂有年上月の輩。未明より攻寄せつれども。城中の防ぎつよくして。むなしく其日もくらしける。玉繩小太郎は夜に入りて(十ウ)佐用に至り。星野に五百人をわけて搦手へ回し。かの火矢を授けて搦手の門も矢倉も焼立て。二時攻に乘取べし」とて。我身も五百人を引きつれて大手へぞ向ひける。寄るがいなや火矢を以て追手の門も櫓もことごとくに火矢を射付し故に。追手擲めて同時に燃上る。城將横塚軍大夫火を消さんと追手へ来れば。はや門は焼落て敵軍乱れ入る。これを防ぎ支ゆるうちに搦手の敵入りて。二の丸へ火矢を射かく。前後左右よりさし夾んで攻ける故に。横塚も終に乱軍の中にて討死す。玉繩は佐用の城を乗取り。火を消し城をとりしづめて。星野にこれを守らしめ。我身は五百の兵を引きて。上月の城へ向はんとす。佐用落城のよし。土居の寄手の陣に聞えしかば。日根野をはじめ赤穂平福丹坂有年上月の諸將大ひに驚き。面々の持城危しとて。土居の城を(十一才)まきほぐして。引き取らんとす。日根野中務云。

「敵中入の策を設けて。引取所を城より追討にせんとす。此殿 最もむつかしく。我後陣たるべし。赤穂平福先陣たるべし。丹坂上月有年中陣たるべし」とて。已に旗を引きかへす。城中は寄手の引取を見て。「すはや敵は引取ぞ」とて。高科岸根田中乾の四士。軍勢二千を帥ひてこれを追かく。日根野取てかへしてこれを防ぎ。返しては引取。返しては引取。上月の城下にてはしなく玉繩が勢と出遭ふたり。玉繩は五百の勢を鋒矢に備へ。おのれ其矢の尖となつて。会釈もなく赤穂の陣に突入り。表より裏へさつとぬけ。又平福の陣にかけ込んで。前より後ろへかけ通り。有年上月丹坂の陣もことごとくにかけ破り。日根野が陣にかけ入りて。右より左りへ。前より後ろへ。りうご。かく繩。蜘蛛手に。散々にかけちらす。日根野これを見て。「にくき(十一ウ) 小冠者がふるまひかな。いでもの見せてくれんづ」と。大身の槍をひつそばめて。玉繩めがけて突てかゝる。玉繩「得たり」とこれと槍を合する事七八合。玉繩日根野が槍をからんで刎ければ。三四間右の方へ飛ちりたり。日根野佩刀を抜んとする所を。玉繩槍とりなほして。日根野が腕より左りの股根へ突込で。一ゆりゆりて。刎ければ。日根野たまらず。勿落さる。郎等おさへて首をかく。総大将討れば。一軍散々に敗北す。玉繩はすぐに上月の城を攻む。上月 忽ち降参す。続ひて有年に至る。これも降参す。丹坂赤穂平福各皆降参す。よつて各人質を取り固めて。津山さしてぞ凱陣しぬ。木工頭殿玉繩が今度の功を大ひに御感称有て。又二百貫の加増にて都合三百貫の身上とぞなりにける。又星野に五十貫の加増にて。都合百貫となり。且つ佐用の城代たらしめ給へり。其他の諸(十二オ)土にもそれらの恩賞有り。津山の威風大ひに振ひければ。播州の赤松家よりも和を乞ひ。伯耆の名和家よりも和を乞ひて。東西の両隣り。各信使の往来しげくなり。(十二ウ)

第十回

著レ土而榮

○玉繩小太郎土居の英姫を娶りて蕃昌するの話

津山の老職小原外記に一人の女子有り。これを星野勢平に妻あはせんと。願ひ上て有りけるが。此ごろ領分いと静に治りけるによりて。此婚義をとりむすびける。又一人の老職高山隼人其妻を喪ひしによりて。星野勢平が姉漣を後妻に迎へたきの旨願ひ出ければ。御聞濟にてこれも婚義調ひける。さても土居の御寮は此頃勝軍の賀義を申さんとして津山の本城に上り給ふ。親子御対面有りて。かの勝軍の賀義を申述られて。さて木工頭殿宣ふには。「頃年真鶴真介を得て。新庄の城をぬき取。作州一円に我領分となれり。又真(二才)介を新庄に居らしめてより。伯耆国四分通りは我領となれり。故に名和家より和義を乞へり。又玉繩今度の勲によりて。西播は已に我ものとなりて。赤松家より節を折て和義を乞へり。これ皆二士の功なり。去にても僅かに一兩年の間に得たる所の士の力らにて。国郡を開き得たる事殆んど過倍にいたれり。治乱の世ともに宝とすべきものは士なりけり」と。いと歎喜の体にて話り有ける。かくて木工頭殿つくづく思しけるには。「さるにてもかの玉繩小太郎は。実に人間未曾有の英勇たり。いまだ少年にして甚だ謙遜たり。其勇智は老成人に過たる事尤甚し。これを嬢英が夫とせば。これ人間愉快の極みたる事なり」とて。やがて奥方に宣ふは。「かの玉繩小太郎は少年にして且つ美男子たり。其文武の達者たる事は聞も及びた(一ウ)まはん所のごとし。我これを以て英の夫とせんと意ふが。英の心底如何あらんとおもふなり。そなたこれをうら問ふて見られよ」と有ければ。奥方やがて英姫を招きて。「殿の思しめす所かくの如きなり。そなたの心底は如何なり。尋みよとの御事なり」と有ければ。英姫のこたへには。「まへにも願ひ上げ候とふり。父上の片腕と



もなり申べき人に候はゞ。貴賤上下をえらばず。これに事へ申べく候。外々へ嫁し申候ては。父の一世に取立給ひし家業の扶けともなり申さざる事故に。何とぞ父の扶けになる人有らば。それには事ゆべし。さなく候はゞいつまでもこのとふりにて。身を終り申べく候と願ひ上し事に候へば。かの玉繩小太郎義。父の一臂の扶けともなり申べき者と思しめし候はゞ。いかよふとも御さしづにまかせ奉らん」と有ければ。木工頭殿大ひに御歎び(二才)にて。老職高山隼人を。玉繩小太郎英姫の婚禮の媒介たらしめ給ふて。其義玉繩に仰せ下さる。玉繩畏り奉りて。さて聳引出として。英姫の所持。二千貫の朱印をぞ下されぬ。かくて婚姻とゞのひしかば。玉繩小太郎は土居の城主となりて。御家門の列につらなりて。二千三百貫の身上とぞなりにける。

第十一回

値レ玉而聚

○真鶴真介玉繩小太郎と父子の名のりを為し。且つ夫婦再会するの話

玉繩小太郎主人木工頭殿へ密に願ひ上げるは。「私義は実は当御家中新庄の城代真鶴真助が子にて御座候。父子の義にて候得ば。当所へ参り申候せつに(二ウ)早速名のりあひ仕るべき義に候所。私母は真介の妾にて候ひしが。私を身ごもり候て三月ばかりの頃に。真介は上京いたし申候。其留守中に真鶴の里は大洪水にて。其辺の在所皆々流れ申候故に。母もやう／＼に水の中のをがれ出で。まづ故郷の玉繩へ帰り申候。後に承り合せ候所。真介はそれより文武の修行に四方に遍歴いたし候よしに御座候。其後私出生いたし候てよりは。紡績機榨業の中にて私を養育いたし居申候内にも。方々より婚義の事申来り候得共。何分私を守り立て。主人の家を興し候はんと云念願なれば。一切外方より申来り候義には食着なく。只私を養育いたし居申候。其頃足柄山の奥に。如々道人と申異人の有りて。天人の道に到達し。文武の道兼具の方にておはし候。私七歳の春。此如々道人の許へめしつれゆきて。文武の道のけい(三才)こ致させたきと。段々相願はれ候所。道人これを領諾有て。其日よりすぐに道人の許に在りて。勤学いた

し申候事。丁ど十年にて御座候。其間は母の紡績機杼裁縫の賃をもつて。私が衣類より諸雜費。及び道人の衣服等をさづけ。四時寒暑の音信を。自身にはるく足柄山へ参りかよひし事。十年の間少しもおこたりなく候。私十七歳の春に。道人母に對して。『もはや学業成りぬるから。つれて歸りて。これより世間へ出て。世を扶け人を救ふを以て業とすべし』と命ぜられ候。さておのれ昨年の春。修行に出候はんとする時に。母おのれに命じけるは。『おことは相摸國真鶴の里の郷士。真鶴真介と云人の子なり。かよふのわけ有りて久しく行別れとなりたり。ほのかに聞ば又真介殿も。今は西国方にて仕官せられしよしなければ。おことも西国方へ往きて。相応の立身せし(三ウ)時に。父御に名のりあひ給ふべし。さらずして寒士襤褸の身にて。父を尋ね給はゞ。妾が身ごもりし事を。父のしらせ給はざりし事ゆゑに。其出処を怪しみ給はん事の恥かしければ。必ず務めて早く立身して。其上にて名のりあひ給ふべし』とのくれぐれの教訓なりし故に。今日まで延引いたし候。殿の莫大の高恩によりて。当時御家中にては第一の身上になり申候故に。父子の名のりいたしたく候。且つ私生の母。其貞節の操介を改めず。貧窮の中にて私を教訓養育して。只今のおのれが才芸は。全くこれ母の苦辛中より練り出しくれられたる所の賜のにて御座候得ば。何とぞ殿の御意を以て。母と父との夫婦の縁再統の義を。仰せ付られ下され候はゞ。生々世々の御高恩有りがたく存じ奉るべく候」と。涙を流して願ひ上げければ。殿も頻りに感歎なされて。「其夫にして此妻(四オ)有り。其父母にして此子有り。おのれも久しく真介と汝とが容貌威儀の似たりつるとは思ひける事なり。第一には眉間の赤痣。父子一同なり。これあらがふべからざるの徴たり。さて其母は何処に有りや。」「故郷に居り候」と申上れば。まづひそかに母を迎へとりて。其上におのれ媒してこれを真介に再統せしむべし」とて。やがてひそかに人を相摸國に遣して。これを津山城中に迎へ取給ひて。奥方の妹ぶとなされ置れ。さて老職小原外記を以て仲人となされ。真鶴真介へ仰下され候様は。「真介義新庄の城代として。伯耆國を押へ鎮むる事苦勞の至りに思しめし候。然る所に真介義いまだ家室こ

れなきよしに付て。奥方の妹生実の方を以て。真介へ下し賜る間。小原外記仲人として婚義有べきよし」の旨なりければ。真介有がたくかしこまり候(四ウ)よし御請申上げる。其日にいたりければ。真鶴真介は供人数多めしつれて。行粧きらを飾りて。新庄より津山の本城へぞ上りける。これは親迎のころなりける。本城にも家中総登城にて。大廳にて。中央には木工頭殿。右の方少し下りて。土居の玉繩小太郎同英姫。左の上坐は小原外記高山隼人右の上坐は真鶴真介。其外は坐格によりて次第に列を正して威儀堂堂として並居たり。木工頭殿真介に仰下されけるは。「今般昏義相調ふて。祝着に思ふなり。さて生実の方は奥方の妹分たれば。我等飯の親分となりてこれを匹配するが故に。賀引出として。汝へ贈る物有」との御意なれば。真介「はつ」と平伏す。木工頭殿「逆も妻を贈るの上は。子をも亦贈るべし。其子といふは外にてもなし。玉繩小太郎義起これなり。汝心に覚へ有り(五才)や」と宣へば。真介申上げるは。「私義これ迄妻をも迎へず候間。子の有べき様はなく候事なれば。一切覚悟仕らず候」と申上げる。其時仰らるゝ様は。「汝真鶴の里に在りし時に。妾に生実といひし者有りと云が。これ覚えつるや」と。真介「なるほど其義は相違なく候」と申。殿仰せらるゝは。「汝十八年以前三月に。京都へ上り居たる留守中に。在所真鶴郷へ大洪水にて。一郷のこりなく流れ行たる事有や」。真介「其義も相違なく御座候」。殿「其時に妾の生実。汝が種を身胎りて。已に三月に及びしなり。右の洪水の中をやう／＼に遁れ出で。故郷玉繩の里の。親彦六が方へ帰り居れり。其後真鶴の様子を尋ね聞し所に。汝京都より帰りて。家内の義は家人五十嵐文蔵に打任せて。すぐさま文武の修行せんとて。諸国遍歴に立出で。再び故郷へは立帰らざりしと云が実(五ウ)なりや」。真介「其義も相違御座なく候」と申。「右妾生実は月満て。其年十月に男子を生みたり。其男子はすなはち玉繩小太郎なり。貧窮困苦の中にこれを養育し。其貞節の操介烈しく。何とぞ此子を守り立て。文武の達人として。再び主人の家を興復せんとて。七ツの年よりこれを足柄山の如々道人の許にあづけ頼み奉りて。文武のけいこいたさせて。紡績機杼の辛苦の中より。小児

の身の回りより。道人へのつかへまで。十年の星霜を積みかさねし。妾生実が丹誠の中より。玉繩小太郎義起と云。古今未嘗有の英勇にこしらへ立たるなり。其貞烈忠義に感じて。我等親分となりて。以前の側室を今正室となして。汝に贈るなり。故に其子小太郎も汝に贈るなり。且つ其子も一人ならず。英姫といふよめまでもそへて贈るなり」と有ければ。真(六才)介は只惟「はつ」と平伏して。君恩の高く厚きと。生実が貞節なると。小太郎が忠孝なるとに感服して。姑らくは面をも得あげず。涙にのみぞふし沈みぬ。すべて並居る諸士も一同に。貞烈忠孝の夫婦親子の参会に。皆々感涙をぞ催ふしける。小太郎は父の下坐に就いて。父の壮健に在したるを賀して。同じく歎し涙にくれ居たる。凡そ玉繩小太郎が当家に有り付てより二年に及ぶといへども。真介は新庄の城の守護たるが故に。一度も対面したる事なし。参合せし事も今日はじめてなり。故に家中の諸士も父と子と相並んで居るを見れば。其容貌威儀寸分たがはず。殊には眉間の赤痣父子の血肉現然たるを視て。皆々称歎したりけり。やがて御暇給はりて。生実の方を新庄へ贈らるゝなり。鼻のりは真鶴真介供人大勢引つれて打立は。次は生実の(六ウ)方の乗もの。其侍婢の乗りもの數十挺前へ後ろに圍繞す。其次は玉繩小太郎夫婦これを守護せり。老職小原外記総押へとしてこれを警固せり。其行列の華麗たる事善をつくし美を尽せり。挙国の人群聚してこれを見物す。近年の壯観たりとなり。

## 第十二回

### 由劍而親

○真鶴真介狩場に於て手練をあらはすの話

此歳津山の領分平均して。一同の豊作なりと監察中より告し上げれば。木工頭殿「それは悦ばしき事なり。然れども一國中には。險阻平坦の差別。早場水場の不同有事なれば。平均して一同の豊作と云事は有まじ」と有りければ。監察官申上げるは。「我々ども御領分中残らず視巡り候所に。雨の(七オ)つがふよく候て。早場水場ともに一同の豊作に相違なく候」と申上げれば。殿大ひに歎かせ給ひて。「一同平均しての豊作ならば。当年は心歎びの事数々重りた

れば。領分中一同に。年貢租税を免して。農民等にくれるべし」と有ければ。老職中申上げるは。「当年の年貢租税一統御免なり候はゞ。農民の歡喜は此上も有まじく候へども。家中諸士への俸給は如何取はからひ候はん」と。伺ひければ。「それこそ平日質素儉約して。余し置たる所の府庫の金銀を取出して。知行取より扶持切米の歩卒に至るまでも。公平にこれを分ち与へめ。さて其金銀を以て。農家の穀粟をかひ求むべし。農家も穀粟のみを抱ひて居らば不勝手なるべきなり」とて。やがて御領分中へ。当年の年貢租税。一統に御免有と云のふれ出ければ。下民の歡悦いはんかたなし。さて冬になり(七ウ)ければ木工頭殿仰出されけるは。「頃年隣国皆々和睦して。久しく干戈の揺く事なし。故に武を修めて。民の田島の害を除くの爲に。此頃に狩を催すべし」と有りければ。やがて其用意ぞ頗りなりける。まづ高山の麓に数十ヶ所の仮家を構へて。其日に至りければ一家中の諸士。思ひの出立にて御供に伺合せり。土居御寮も御ともなり。依田兵部これ守護せり。殿の左右には小原外記高山隼人伺候す。正面には真鶴真介これを警固せり。其外玉繩小太郎。星野勢平。吉岡兵左衛門。大井新三郎。高科弥藤太。岸根逸人。奥村吉作。内藤総太。土屋五郎。井上太郎作。有馬三八。坪井兵太夫等をはじめ。家中の壮士。我もと狩立けるが。或は弓を以て射とめ。或は槍だまに上げ。或は長刀にかけ。或は太刀にてしとめ。或は手捕りにするも有り。其獲もの(八才)獲ものを悉くに本陣にさぐれば。有司これを帳面にぞ記しとめぬ。中にも玉繩が矢にて射取たる所の獲もの。數百疋とぞ記しける。第二日めには。尚山深く狩り入りて。數万の歩卒。八方に分りて。山々谷々のこりなく狩立けるが。如何したりけん歳経たる猪の。其形はこて牛よりも大ひなるが。矢疵を負ふて。荒に荒て。數千人の歩卒を牙にかけて。右と左りとへふり付くして。終には木工頭殿の陣屋をめがけて狂ひ来たり。かくと見るより真鶴真介猪の向ふに立塞がる。猪はこれを見て猶もたけりて鼻あらしを吹て飛かゝるを。飛違ひさまに抜打に切付けるが。二つにぞなりたりける。殿をはじめ並居る諸士。「したりやく」と称歎す。其猪を取よせて。御覽有る所に。左右の牙をか

けて。口のさけめより尾筒（八ウ）まで。墨尺を当たるが如く。切め正しくぞ有ける。かくて狩も終りければ。各御とも申上て。獲ものを大勢の歩卒荷なひつれて。津山の城へぞ入らせたまひけり。

○木工頭殿真鶴真介が佩刀を御覧じてより兄弟たる事を証し話説給ふて。いよ／＼君臣相親しみ給ふの話。

狩りの翌日にいたりて。木工頭義惠殿。真鶴真介をめされて。「昨日手負猪の一義尤も狩場のならひとはいへども。其方がさそくの手際感心の至りに思ふなり。固より其方が手練かく有べき事ながらも。かの大なる猪を。ぬき打に切りけるに。左右の牙よりかけて。尾筒迄切り離せし事。其刀も名作の物と覚ゆるなり。一覽したし」と有ければ。真介やがて佩（九才）刀を御前へぞさゞげける。木工頭殿其外のこしらへをためつすがめつ眺め入り給ふて。さて其身を抜はなして。とくと御覧有て。さて真介に向ひて宣ひけるは。「此佩刀は汝外より買ひ求めたりや。又は重代なりや」と御尋なり。真介「先祖相伝の重代にて候」と申。殿其時に「然らば其中心表に片仮名にて『トモチカへ』と有て。又真字にて『行忍』といふ二字有べし」と宣へば。真介「御意の通りに相違なく候。恐ながらおのれが重代の佩刀の銘を如何して知しめされし御事にや。殊に不審に存じ奉り候」と申上ければ。木工頭殿「尤も至極の不審なり。其義は後にて分明に知るゝ事なり。さらば其方が父は三浦真左衛門尉。義包と称したるべし」と有ければ。真介「これ以て御意のとふり相違なく候」と申上る。其時木工頭殿「然るに汝は何と（九ウ）て三浦を名のらずして。真鶴とは称しつるぞや。」真介かしこまりて申上けるは。「私父真左衛門尉義包。初めは三浦を称し申候。結城合戦にも勲功をあらはし申候。其せつ迄も三浦を名のり申候処。鎌倉管領家に。何か憚かる事の候ひしより。在所の名を其まゝ真鶴と改め称し申候よし。おのれを育て申候めのものがたりにて候。おのれは幼稚時に父母に離れ申候故に。何事もしかとは存じ申さず候」。其時木工頭殿自分の佩刀を出して。これを真鶴に見せ給ひて。「汝が重代の佩刀と。同じ表かざりにてはなきや」と有ければ。真介はこれを三度いたゞきて。さてとくと視る所に。少しもかはらず同じ模様な

りけり。真介「恐れながら同じ様に相見え候」と申上る。殿「ぬきて其身を見よ」と有ければ。真介「御免下さるべし」とて。遙かの後ろへすきりて。ぬきてこ(十才)れを視る所に。地がねの鍛錬肌目淬刃より全体(ぜんたい)の古び位迄。毛頭かはらざりける。真介申上げるは「恐れながら此御佩刀とおのれが佩刀と同作の様に存じ奉る」と申ければ。木工頭殿「其義なれば其方は我腹がはりの弟なり」と御意有ければ。真介「それは如何なる義にて候哉」と伺ひければ。「元来我は三浦真左衛門尉義包が妾腹の子たり。其妾三浦の家(あ)に在りて。我を娠んで已に五月に及べる頃。本妻の妬つよくして。傷害の事にも及ぶべかりし故に。父の真左衛門。密かに此佩刀と金子百兩とを母に与へて。「何方へも行て。何人になりとも嫁すべし」とて。これを落したり。此佩刀は三浦介義澄以来相伝重代の重宝。伯耆国大原真守が作にて。陰陽二振の劍なり。今汝が佩たる方は陽の劍なり。我佩たるは陰の劍なり。其作者の伯耆真守は。嵯峨天皇(十ウ)の御宇に勅命を奉りて。御太刀を鍛ひ奉る。其時の御製に。

ともちかへあとををしまぬ千鳥にて。行もやらせぬ月の雲のは

これより真守が隠し銘に。『トモチカへ』と片かなにて表銘に彫り。『行忍』と真文字にて彫り。『月卿雲客』と真文字にて彫りたり。此陰陽の太刀は。其隠し銘を両刀に彫りわけたり。陽の太刀に。『トモチカへ。行忍』と彫り。陰の太刀に『月卿雲客』と彫りたるなり。故に汝が佩刀の中心の銘を知りたる事なり。さて我母は我を生み落して。縁によりて此久世家へ我をつれて嫁したり。其後には子を生む事なかりし故に。父久世三左衛門我等を家督とせり。母の末期の時に臨んで。おのれが三浦真左衛門尉が実子たりし事を話たり。此陰の太刀を譲り与へられたり。故に汝と我とは腹がはりの兄弟たる(十一才)事実正明白たり。故に今汝に新庄の城を与へ。城付三千貫を汝が領分とすべし。汝を今日より家門とするなり。さて此陰の劍を汝に与へて。汝が陽の劍を小太郎に与ふべし。さて汝は今日より新庄真左衛門尉と名のるべし。又玉繩小太郎を土居真介となのらすべし。元来三浦も真鶴も玉繩も皆本姓には非ず。

すべて在所の名を称号とせしものなればなり」と宣ふ。其時真左衛門尉懐中よりなにか一つの書ものを出して。「恐れながら」と御前にさし出す。木工頭殿へ御覽有所に。如々道人の四言十二句の偈文なり。真左衛門尉申上げるは。「おのれ十七歳の春。足柄山の如々道人の許に参りて。『終身の進退取舍の大事を告知らしめ給へ』と請ひたりし時に。老師の此偈文を記して給りぬ。今を以てこれを考へ申し候所に。悉皆符合いたし候。まづ(十一ウ)第一句に水に遇ふて漂とは。即ち同年の春洪水に一郷皆流れ果申候故。それより四方遍歴に出申候。これ水に遇ふて漂にて候。第二句に金に逢て止るとは。常陸花園山の麓にて。金津帯刀と申郷土に遇ひ申候。これも如々道人の門人にて。天文望氣監相音律の術に長じ申され候故に。こゝに五年とよりういたして修行仕候。これ金に逢ふて止まるにて候。第三句に。山を望んで去るとは。京都に六七年とよりうの中。山名宗全我を招きて臣とせんといたし候へども。おのれ宗全が人と為り心に能はず候故これを辞し申候て。京都を夜ぬけいたし候。これ山を望んで去るにて候。第四句に。石に抛りて困むとは。石見国にて仕官仕候所。出頭の寵臣おのれを忌で。他国より内通の密使をこしらへて。おのれを入牢いたさせ候。これ石に抛りて困むにて候。第五句に。(十二才)星を見て走るとは。右の如く入牢いたし居申候処。星野勢平身上をすて、救ひ出し俱に当国へ遁れ来り候。これ星を見て走るにて候。第六句に木に縁て立とは。御当家へ参りて有付出来。御高恩を蒙り候義にて。木とは。恐れながら御前様の御爵号にて御座候。これ木に縁りて立にて候。第七句に。道に従がふて学ぶとは。これより十句迄は愚子小太郎が事にて候。道とは。如々道人に従がふて修行いたせしことにて。これ道に従ふて学ぶにて候。第八句に。馬に乗りて進むとは。小太郎放れ馬に乗りしより。御当家へめし出されし事にて。これ馬に乗りて進むにて候。第九句に。日を得て昇るとは。赤松家の勇士。日根野中務を討取りし故に御加恩にあづかり申候。これ日を得て昇るにて候。第十句に。土に著て榮ふるとは。土居御寮を得て蕃昌いたすにて。これ土に著て榮ふるにて候。第十一句(十二ウ)に玉に値ふて聚るとは。玉繩御当家へまい



り立身して。父子の名のりを願ひ上候処。父子夫婦相聚り候事。これ玉に値ふて聚るにて候。第十二句に。劍に由て親むとは。即ち今日の事にて。おのれが佩刀。思ひがけなくも御上覧に備はりしより。血肉たるの義分明にてかたじけなくも。只今の身分に仰せ付させら(れ)し事ども。これ劍に由りて親しむの義にて御座候」と申述べければ。木頭殿甚だ感心なされて。「さても〳〵其如々道人と申方は。実に人には非ずして。鬼神の変化たりとぞ思はるゝなり。汝が終身を指し示し給ふ事かくの如し。小太郎を教へ導びき給ふ事かくの如し。道の程近くば。我も登山して拝謁したきものなれども。今乱世にして数許の敵国を越え行事なれば。率時にはなりがたし。よきをりも有べし」とて。其称感ことに深かりける。かくて新庄真左衛門尉。(十三才)土居真介。ともに御家門たるのよし。一家中は勿論御領分中のこらずふれながし有たるより。国人これを新庄殿土居殿と称して其尊仰殊に甚しくして。君臣父子兄弟夫婦いたりてむつましく。いよ〳〵国家蕃昌して長久にぞ治まりける。(十三ウ)

